中央大学

第１回タイ短期研修プログラム報告書

2015 年度

中央大学国際センター

目　次

はじめに..... 2

１．中央大学タイ短期研修プログラム概要..... 3

２．タイ現地研修活動報告..... 5

３．参加者の報告..... 20

４．中央大学タイ短期研修プログラムに同行して感じたこと..... 43

５．事前研修の概要..... 44

６．タイ短期研修プログラムの意義..... 49

あとがき..... 58

カンチャナブリー　　映画「戦場にかける橋」の舞台にもなった、クウェー川鉄橋

はじめに

2016 年 2 月 11 日から 20 日までの 10 日間の日程で、中央大学タイ短期研修プログラムを無事に終えることができました。

この研修プログラムは、異文化理解や日本の国際協力、NGO 等による社会的弱者への支援活動などについて理解を深めるとともに、ボランティア活動を体験する目的で実施されました。本学では、語学研修など以外で、国際協力や海外ボランティア活動をテーマとした海外研修プログラムを、全学的に学生を募集して実施するのは初めての試みでした。

本学はタイにおいて多様な交流と知見の共有を図り、教育･研究・社会貢献活動をより活発に展開するために、2014 年 12 月 1 日にタマサート大学に中央大学の海外拠点「中央大学・タマサート大学コラボレーションセンター（中央大学タイオフィス)」を開設し、タイにおける本学活動の拠点として活用されています。本研修プログラムは、このようなタイにおいて本学の活動を一層活性化させるための一環として行われました。

本研修では、タマサート大学ランパーン･キャンパスで同大学の学生とプレゼンテーションやディスカッションなどを通じて交流を行いました。タイの名門大学の大学生と意見を交わすことは、本学の学生にとってとても貴重な経験となりました。特にタマサート大学の学生の勤勉さや積極的に発言をする姿勢は大いに刺激となりました。また、国際協力機構(JICA)タイ事務所や JICA の協力現場での研修を通じ、国際協力の重要性について学ぶとともに、NGO 等による社会的弱者への支援現場における研修やオーガニックファームにおける農作業などを行い、社会貢献についても理解を深めることができました。

本研修プログラムには理工学部を含めた様々な学部から､1 年生から 4 年生まで 13 名の学生が参加し､全員がお互いに初対面からスタートしました｡しかし、二度の事前研修を経てお互いが顔見知りになり、現地研修ではすっかり皆が打ち解け、和気あいあいとした雰囲気で、全員がいつも笑顔を絶やさず、仲間と助け合いながら積極的に研修に励みました。

また、本研修は、多くの方々のご支援なくしては実現できませんでした。現地で研修を受け入れて頂いた関係諸機関の皆様、学内でご協力頂いた国際センターをはじめとする関係者の方々、事前研修に一緒に参加してくれたタイ人留学生、タイ交換留学経験者の学生各位に心より感謝申し上げます。

中央大学国際センター　第 1 回タイ短期研修プログラム担当
小川正純、河本梨絵

１．タイ短期研修プログラムの概要

（１）参加者

浅羽 正太	法学部法律学科１年
網野 悠介	総合政策学部国際政策文化学科１年
池田 木綿奈	理工学部人間総合理工学科１年
小林 昴文	経済学部経済学科３年
小山 正恵	経済学部国際経済学科１年
佐藤 真子	法学部法律学科３年
立川 貴子	経済学部公共・環境経済学科２年
田邊 ちひろ	文学部人文社会学科（英文）２年
知念 竜馬	法学部法律学科１年
富井 佳織	法学部政治学科４年
野口 桃花	経済学部公共･環境経済学科１年
堀 翔一朗	法学部法律学科２年
山口 哲也	法学部政治学科１年

※所属・学年は研修参加当時のもの

（２）引率者

小川 正純	国際センター/公共政策研究科客員教授
河本 梨絵	国際センター
Teera　Insawat	Chuo-Thammasat Collaboration Center

（３）研修の概要

①事前研修

第１回　2015 年 11 月 5 日（木）＜後楽園キャンパス＞
2015 年 11 月 6 日（金）＜多摩キャンパス＞

・現地研修の概要及び目的の説明、訪問先の紹介等

第２回　2016 年 1 月 16 日（土）＜JICA 市ヶ谷ビル＞

・地球体験学習
・課題発表
・タイ人留学生によるタイの紹介
・タイ語(会話、文字)
・プレゼンテーションの準備

②タイ現地研修

■研修日程

日付		都市	活動内容
1	2/11		[東京～～バンコク～～チェンマイ]
2	2/12	ランパーン	①タマサート大学ランパーンキャンパス （学生交流、地域交流）
3	2/13	ランパーン	ランパーン市内視察 ーワット・プラタート・ランパーン・ルアン（寺院） ータイ象保護センター [チェンマイ～～バンコク＝＝カンチャナブリー]
4	2/14	カンチャナブリー	②生き直しの学校 （活動視察、子どもたちとの交流）
5	2/15	カンチャナブリー バンコク	カンチャナブリー市内視察 ークワイ川鉄橋 [カンチャナブリー＝＝バンコク] ③ＪＩＣＡタイ事務所 （日本のタイに対する国際協力の現状についての講義）
6	2/16	バンコク	④ドゥアン・プラティープ財団、クロントイ・スラム （スラム視察、支援活動視察、地域の子供たちとの交流） ⑤アジア太平洋障害者センター（ＡＰＣＤ） （障害者のエンパワーメントについての講義、ワークショップ）
7	2/17	バンコク	⑥タンヤポーン女児保護センター （青年海外協力隊の活動現場視察、入所者との交流） ⑦タイ国家警察大佐 戸島国雄氏による講義 （人間の「癖（へき）」と犯罪、日・タイでの経験について）
8	2/18	バンコク郊外	ダムヌンサドゥアク水上マーケット 午後 自由行動
9	2/19	カオヤイ	[バンコク＝＝カオヤイ] ⑧ハーモニーライフ オーガニックファーム （有機農業について講義、肥料作り体験）
10	2/20		[バンコク～～東京]

[　]：移動（～～：空路、＝＝：陸路）

２．タイ現地研修活動報告

タマサート大学ランパーン･キャンパス

法学部法律学科１年　浅羽 正太

私たちが訪問したタマサート大学は 1934 年に設立されたタイの名門国立大学であり、タイ国内ではチュラロンコン大学に次ぐ歴史を有する。「タマサート」はタイ語で「法学」を意味するように、特に法律・政治分野において、数多くの著名人を輩出している。また、中央大学とは 1986 年以来協定関係にあり、2015 年にはタマサート大学タープラチャン・キャンパスの法学部棟に中央大学のオフィスが設置された。

中大生による日本の紹介のプレゼンテーション

今回、私たちは北部の主要都市チェンマイの隣の県にあるランパーン・キャンパスに訪問した。ランパーン・キャンパスは広大な土地を有し、どこか中央大学の多摩キャンパスと似ているようにも感じた。私たちが訪れたとき、大学は休暇中であり、とても閑散としていた。

活動内容としては中央大学からは日本の紹介、中央大学の紹介、同性婚の是非に関するプレゼンを英語で行い、日本の伝統文化の紹介の一環として、ソーラン節を披露した。タマサート大学側からはタイとタマサート大学の文化、地理、歴史などのプレゼンのほかに、タイの伝統的なダンスも披露された。また、両大学による同性婚に関する意見交換も行われた。同性婚に関する賛成側の意見からは、個人尊重や社会の変化などが、反対側の意見からは家族制度の崩壊、生物学的な法則に反していることなどが挙げられ、とても活発な議論となった。プレゼンの間の休憩時間にはタマサート大学の厚意により、タイのジュースやパン、甘いお菓子などが振る舞われた。

同性婚についてのディスカッションで発表するタマサート大学の学生

これらの活動が一通り終わると、両大学の学生同士でのフリーな交流の時間が設けられた。そこでは日本のお菓子を配ったり、記念写真を撮ったり、お互いの国の文化を話したりととても有意義な時間を過ごした。お菓子は特に抹茶味のものに人気が集中した。特に印象に残った

のはニックネームについて聞かれたことである。タイは名前が長いため日本人よりもニックネームをつける習慣が根付いているのである。

昼食にはタイの伝統的な麺料理とヨーグルトのような甘いものが振る舞われた。麺の辛さとヨーグルトの甘さが絶妙にマッチし、とても美味しかった。午後からはタイの現地の方から伝統的な工芸品の作成を体験した。板に糸を永遠に通す編み物のようなもの、葉に団子のようなものを巻き続けるようなもの、生け花のようなものなど多くの文化に触れた。

タマサート大学ランパーン･キャンパスの」学生と一緒に

ランパーンのコミュニティーの人達と一緒にタイ北部の伝統的な民芸品作りを行う

特に生け花に関しては土台となる花瓶のようなものも葉で作るため、とても難しかった。

体験学習終了後、夜はタマサートの学生たちとホテル近くの露店で一緒に食事を楽しんだ。そこは日本でいう「夏祭り」のような雰囲気でとても賑わっていた。焼き鳥、ウインナーのような定番のものから、スパイシーサラダという名前からして辛そうなタイ料理、寿司、タコ焼きのような日本食、芋虫のような食べることをためらうようなものまで、様々なものが置かれていた。ほとんどのものが 20～５０円ほどで売られていてとてもリーズナブルであった。

タマサートの学生たちは勉強するときはとことん勉強し、遊ぶ時はとことん遊ぶ、勉強と遊びのバランスのとり方が上手で有意義な学生生活を送っているように見えた。語学に関しても英語を話すことはもちろんのこと、私のように単語を並べることしかできないような人とも熱心に聴き取ろうとする姿勢と技術に感動した。また、プレゼンを見ても、とても堂々たるもので、説得力のあるものであった。海外の大学生と触れ合うことは多くの発見があり、また、刺激的でもあった。私もタマサートの学生たちに負けないよう、この経験を今後の学生生活に活かしていきたい。

生き直しの学校

法学部法律学科 3 年　佐藤 真子

現在、タイの至るところで青少年の麻薬の乱用が蔓延しており、大きな社会問題となっています。そこで、自然や農業を通して青少年を救うために設立されたのが「生

生き直しの学校の子ども達と一緒に折り紙をつくる

き直しの学校」です。この学校は、タイのドゥアン・プラティープ財団が運営をしています。同財団は、主にタイのスラム街のストリートチルドレンを対象に教育による社会更生を目的とした事業を行っています。生き直しの学校はチュンポーンとカンチャナブリにあります。今回、私たちが訪れたのはカンチャナブリ校です。

はじめに、子どもたちや学生がそれぞれ出し物をしました。子供たちは、タイの踊りや今流行しているダンスなど一生懸命に披露してくれました。私たちも、日本で練習してきたソーラン節と歌の披露をしました。お互いにそれぞれの言葉がきちんと通じるわけではないのですが、一緒に楽しめたことがとても印象に残っています。

また、子どもたちと交流する時間には、折り紙やお絵かき、バスケットボールやサッカーなどをしました。日本の遊びの折り紙は学校の女の子たちに人気があり、みんなたくさんの鶴や紙飛行機を作っていました。作ってくれた折り紙を私たちに見せてくれたり、プレゼントしてくれたりしたのがとても嬉しかったです。

生き直しの学校の子ども達がくれた歓迎の花束

次に、子どもたちと交流するだけでなく、タイにおける青少年を取り巻く環境について、その環境の中で抱える課題に対してどのような取組みを行っているのか、子どもたちにどのような教育をしているのかを学校の職員の方々に説明して頂きました。学生ひとりひとりが説明を聞いたうえで、質問をし、理解を深めることができたように思います。職業訓練として、農作業やパン作りを行っている施設も見せて頂きました。他にも、石鹸やケーキ、キーホルダーなどを作りさまざまな訓練をしているようです。

子ども達がつくった中大生を歓迎する看板

生き直しの学校は、虐待を受けた子どもたちや麻薬に巻き込まれたなど暗い過去を持つ子どもたちが教育を受ける場です。その中で精神的に受けたダメージは図り

しれないものだと思います。そんな子どもたちが何を思っているのか、思いをくみ取るためにアートセラピーも行われています。言葉ではどうしても伝えにくいことを、アートによって表現してもらうのです。職員の方々は、本当に子どもたちひとりひとりのことを思って日々過ごしていることを強く感じました。

つらい経験をしているにもかかわらず明るく笑顔を絶やさない子どもたち

現在、「生き直しの学校」に通わなければならない子どもたちの数は増加傾向にあるそうです。それだけ子どもたちを取り巻く環境は良いものではないということです。日本でも少子高齢化が進み、高齢者に対する支援やサービスに目がいきがちです。

子どもたちに対する支援やサービスに関して改めて考えるきっかけにもなりました。

この学校を訪れる際、タイ語しか通じないと言われ、コミュニケーションが取れるかどうか不安な部分もありました。しかし、交流しているうちにその不安は消えました。お互い言葉がきちんと通じるわけではありませんが、不思議とどんなことを考えているかはわかるものです。交流を通して、学生みんなが子どもたちに元気とパワーをもらうことができました。

JICA タイ事務所

総合政策学部国際政策文化学科１年　網野 悠介

研修も折り返し地点に差し掛かりこの日は午前中カンチャナプリの観光をしたあとバンコクに入り国際協力機構（JICA）タイ事務所を訪問しました。JICA タイ事務所はバンコク市内のオフィス街、高層オフィスビルの３１階に所在していました。事務所に到着し部屋に案内されるなりオフィス３１階からの景色に圧倒されます。車、バイクのものすごい数、高速道路の入り組んだ設計、たくさんの高層ビルなど今までタイの郊外をまわってきた私たちにとってバンコクの開発が進んでいる風景はどこか別の国に来たような衝撃を受けました。

ODA の役割と JICA の仕事などについて講義をする JICA タイ事務所の木下次長

JICA での研修は座学。JICA がタイの地でどのような国際協力の役割を果たしているのか学びます。講師は JICA タイ事務所次長の木下さんが務めてくださいました。研修はまず参加学生がここまで５日間タイを見てきた感想、この研修に参加した経緯などを発表するところからスタートしました。主なものとしては前日に訪問した「生き直しの学校」での衝撃を語る生徒が多く改めて前日の子供たちの顔が浮かびました。私はタイの地で国際協力によって開発された部分が見たく、都会化が進んでいる残りのバンコクでの研修が楽しみであるとの発言をしました。各生徒の発表を親身に聞き、自分の意見も交えフランクにレスポンスしくれる木下さんのおかげで少し緊張が解けた気がしました。

各学生の発表が一通り終わって木下さんの講義に移ります。木下次長の講義テーマは大きく分けて３つ「開発途上国とは？」、「ODA の役割と JICA の仕事」、「タイへの ODA、JICA 事業」。開発途上国のテーマでは水の問題、教育(学校)の問題に焦点を絞って講義、ディスカッションが行われました。貧困地域では教育を受けられない、読み書き計算ができない、安定した職業に就けない、収入が少ないこの四つの項目が負のスパイラルとなり貧困から抜け出せない現状を知り改めて教育の大切さを知りました。

水の問題では途上国で死亡する子供の５人に一人が水で亡くなっているという現実を受けて衝撃を受けました。また生活必需品の水ですが、途上国では水が得られる場所が少ないところが多く、運ぶのは子供や女性に仕事となっています。ここにもまた子供が教育を受けられない原因が存在するのです。JICA 地球ひろばで行った事前研修で途上国に対する多少の知識は養っていましたが、JICA 職員としてパレスチナなどの紛争地域なども見てこられた木下さんの言葉にはどこか新鮮かつリアルな感じがありとても心に入ってくるものでした。

続いて ODA と JICA についてお話があり、JICA で働くということは「国創り」への挑戦だと木下さんがやりがいにあふれた顔で語っているのがとても印象的でした。あくまでも ODA の主役は途上国であり JICA は途上国政府との対話、他の援助機関との協議、現場調査などに徹しその国の未来を見据えた最善の開発を探っていくこと。ただお金を貸すだけでなく開発先の国が自力で伸びていけるような支援をすることが大切だと繰り返し講義の中でおっしゃっていました。そしてタイでの ODA の事例として空港建設や浄水場設備の建設などのインフラ整備から港湾開発や農業開発、高齢化社会に対する技術協力など様々紹介してくださいました。ODA で建てられたスワナプーム国際空港は実際に使用し、本当にきれいですばらしい施設

JICA の円借款による協力で建設されたバンコクのスワナプーム空港

でした。

JICA タイ事務所にて

今回の JICA タイ事務所の訪問では実際に現場で日本を代表し国際協力を行っている方の話を聞けてとてもいい経験になりました。JICA の仕事は途上国の演出家(人、モノ、お金)を使ってノンフィクションドラマを作ることだと木下さんの最後のまとめの一言が頭に残っています。やりがいにあふれた表情で語る木下さんを見て JICA の仕事について興味を持つきっかけになりました。また青年海外協力隊などボランティア活動なども質疑応答で話題に上がることで JICA は本当に様々な国際協力に機関だと改めて思いました。

今回の研修では生き直しの学校、APCD、タンヤポーン女児保護施設、プラティープ財団などどちらかというと現場の最前線に訪問することが多かったように思えますが JICA のような国際協力の架け橋のような仕事も詳しく知ることができ様々な国際協力の形があると実感し、またさらにその分野に興味を膨らましてくれるとてもいい訪問になりました。

ドゥアン・プラティープ財団(クロントイ・スラム)

法学部政治学科 1 年　山口 哲也

東南アジアの雄といわれ、近年の経済成長が著しいタイの首都バンコク。その繁華街やビジネス街はタイの勢いを象徴するに相応しい発展ぶりであった。そこだけ見れば、ニューヨーク、ロンドン、パリ、そして東京など、先進国の主要都市と何一つ変わらない生活水準が保たれているように思えた。しかし、そこから車で 20 分程度走っただけで着いたその場所には、都心とはかけ離れた光景が広がっていた。そこにあった家屋は古く、清潔感に欠けていたり、所々壊れていたり、そしてもちろんのこと空調設備などは整っている訳もない。通りにはごみが散乱し、野良犬がいて、その中を裸足で走る子供もいた。服装もみすぼらしく、みんながみんな頻繁に洗濯出来ていないようだった。そんな環境で飲食物を売っているものだから、日本の住環境に慣らされた私たちから見ると衛生的に大丈夫なのかと思ってしまったりする。

今回訪れたのは数あるスラムの中で、ドゥアン・プラティープ財団が支援活動を行っているスラムであった。同財団が運営するスラムがあるクロントイはバンコクでも最大級といわれている。現在、その経済発展に焦点があてられることの多いタイであるが、実はそれと同時にタイは世界有数の所得格差大国でもある。高度な経済発展の過程で、バンコクには多くの人々が職を求め流入してきた。しかし、その全員が職にありつけるわけではなく、いつしかバンコクにはスラムが多く形成されるに至った。同財団の設立者であるプラティープ・ウンソンタム・秦氏はここで育ち、その経験から貧しい子供たちのために「1 日 1 バーツ学校」を設立(1 バーツ=3 円～3,4 円ほど)し、その活動が評価され賞を受賞し、その賞金を投じて財団を設立したり、「生き直しの学校」やスラム街に多くの保育園を設立したりと、貧困問題に多大な貢献をしている方である。

クロントイ･スラムの風景

スラムを実際に歩いてみて驚いたのは、スラムの中での子供たちの教育環境が整えられていたことだ。スラムを見学する前にスラムや貧しい人たちの生活ぶりが写っている写真は幾度となく目にしてきたので、ある程度スラムの住環境の想像はついていた。しかしそんな中で、子供たちの学習環境が整えられていることはもちろん予想外のことであったし、非常に良いことであると思った。読み書き算盤が満足にできないと日常生活はおろか、働こうにもできる仕事が限られてしまう。世界的に貧困地域では教育が受けられないことが問題視されているなかでこのような取り組みが出来ていることは非常に良い環境だと思った。

ドゥアン・プラティープ財団の幼稚園で交流

そこでは、子供たちと歌や踊りの交流をしたが、子供たちはとても明るく楽しそうであった。私は子供たちが貧困地域に生きているが故に、悲観的で笑顔をあまり見せないものかと勝手に思っていたが、それも杞憂に終わり楽しいひと時を過ごすことが出来た。子供たちとの交流以外に、そこではプラティープ氏のことや財団についてのお話を伺った。一番印象に残っているのは、阪神淡路大震災のことである。あの震災で大きな被害を受けた日本に、なんとプラティープ財団から寄付が送られてきたのだ。その寄付金はプラティープ氏がこのスラムの住民からなけなしのお金を集めて送ってきたものだというが、ただでさえ貧しいここの住民が、遠い異国の災害に自らの身を削ってまでも寄付金を送ってくれたということに、私は非常に感銘を受けた。この時だけでなく、東日本大震災や日本以外の国

で起こった災害の寄付金をも送っている。タイは物価が安いため、日本円に直すとかなり小さい額になるかもしれないが、金額では推し量れないほどの気持ちを頂いたことに感謝してもしつくせない。この心がけを見習って、自分に出来ることをしていきたいと感じるお話であった。

我々の日常の生活水準とは全く違う世界を目にしたのだが、寄付金の話であったり、教育の話であったり感心させられることが多かった。しかしここのスラムで暮らす人々の生活を目の当たりにしたが、忘れてはならないのはこのスラムで暮らす人たちよりもさらに苦しい生活を強いられている人が世界には多くいるということ。このスラムは同財団が支援活動をし、教育も行われていて、何よりタイという国自体が豊かになってきていること。タイよりも経済的に豊かではない国はまだまだ多くあり、スラムに住んでいるいないにかかわらず、教育を受けることのできない子供もまた大勢いる。ここのスラムに暮らす人はもちろんのこと、世界の多くの貧困層の人々のために、自分にできることをしていきたい。

アジア太平洋障害者センター

経済学部公共環境経済学科 2 年　立川 貴子

アジア太平洋障害者センター（APCD）は，アジア太平洋地域の障害者の地位向上を目的としたタイ王室が後援する財団です。APCD は，タイ政府と日本政府・JICA の協力により 2002 年に設立されました。

APCD の Executive Director 二宮アキイエ氏による概要説明

世界人口の約６割が居住するアジア太平洋地域では、推計約３～４億人の障害者が生活しています。開発途上国の障害者の多くは、非障害者と比べて経済社会開発への参加の機会に乏しく、結果として、経済的に貧しくかつ社会的に弱い立場に置かれています。APCD では、障害者が主体となる社会開発として、草の根の障害者支援の知識・経験といった“情報”、および障害当事者をはじめとする“人材”など、アジア太平洋地域の資源を開発・活用・共有して、当該地域の開発途上国の“障害者のエンパワーメント”と“社会のバリアフリー化”を推進していくことを目的に行っています。

障害当事者である APCD のスタッフが研修のファシリテーターをつとめる

APCD を訪問したとき、みなさんが私たちを温かく迎えてくれました。APCD に勤めている人の多くは障

害を持っている人です。

私が驚いたのはAPCDに勤めている方々の自己紹介のときです。一人の女性は周りの人と普通に会話をしていて、普通に自己紹介をしていました。けれど彼女は聴覚障害者でした。彼女は人の唇から何を言っているのか読み取りコミュニケーションをとっていると言っていました。彼女は聴覚障害というハンディキャップを抱えながら大学も卒業しAPCDで働いています。私はこの事実を知ったとき、とても驚きましたし、すごいなと思いました。また、APCDで働いている方はみんな笑顔できらきら輝いていました。彼らの姿に私は心が打たれました。

また、施設の見学をさせて頂きました。宿泊施設の部屋の見学をした際、障害者の方が滞在しやすいよう様々な工夫がされていました。仕事場見学ではみんなが生き生きと働いていて、とても素敵だなと思いました。お互いを尊重しあい一人一人威厳をもって働いている姿に心が奪われました。また、APCDのなかにあるパン屋はすべてが手作りでとてもおいしかったです。

ワークショップを行いました。内容としては４チームに分かれ、チーム対抗で行うゲームでした。参加者は口にバンダナを巻いてお互いに話をしてはいけないルールで、時間内に新聞紙とテープを使って、一言も話さずにいかに高いタワーを作れるかというものでした。最初ルール説明の時は簡単なゲームだなと思っていました。けれど実際にやってみると同じチームの人とコミュニケーションを取ることができないため自分の考えが上手く伝えられずとてももどかしい気持ちになりました。また、同じチームの人も私にジェスチャーやアイコンタクトでコミュニケーションをとってくれていたのですがなかなか理解することができませんでした。結果私たちのチームが一番小さいタワーで最下位でした。言葉がないことでこんなにも相手に伝えることの大変さがあることに衝撃を受けました。APCDで働いている方々は障害を抱えながらもそのハンディキャップに負けずに、強く、まっすぐ生きている姿に感動しました。

APCDでは多くのことを学ぶことができました。私も彼らを見習ってこれからも頑張ろうと思いました。

APCDの運営するベイカリーでは障害者の人が働いている　日本のヤマザキ製パンが技術協力を行っている

障害疑似体験のワークショップ　話が出来ない状態で、新聞紙を使ってグループ毎にタワーをつくる

タンヤポーン女児保護施設を訪れて

文学部人文社会学科２年　田邉 ちひろ

2016 年 2 月 17 日水曜日、私たちはバンコクから程近いパトゥムタニーにある「タンヤポーン女児保護センター」を訪れた。周りは畑や平地に囲まれ、非常にのどかな場所にある。ここは名前にもあるように、様々な問題により家族と暮らすことのできない女児たちを保護している施設である。６～１８歳までの女児計１２２人（２０１６年２月１７日時点）が在籍し、彼女たちに対し、医療サービスやメンタルサポートといった基本的な保護活動から、職業訓練、一般教養やモラルの指導といった教育的活動を行っている。ここでの生活を終えた後は、社会復帰を遂げたり、家族のもとへ帰っていったりする。また、別の施設に入所するケースもあるそうだ。どんな場合でも、出所後はフォローアップがなされ、家族がその子を受け入れられているのか、きちんと社会復帰できているかというように手紙等でその後のサポートもされる。そしてここには、日本から海外青年協力隊として野村麻美さんが派遣されており、職業訓練の一環として手工芸を指導している。

私たちはここで青年海外協力隊の方の活動を視察し、女児たちと踊りや歌、食事を通して交流した。まず、座学を行い、タイ語のパワーポイントと日本語の説明でこの施設がどんなところであるか、その活動内容等の説明を受けた。野村さんが協力隊としてここで活動することになった経緯や実際の様子などの貴重な話も聞くことができた。協力隊として２年間の海外活動をするにあたり、日本での職を失う可能性があること、しかしそれ以上に大きな経験を積み、学ぶことができること等の話を聞き、青年海外協力隊についての理解が深まり非常に有意義な時間であった。

座学で青年協力隊員の野村さんの話を聞く

座学後は、大きなホールに招かれ、お互いの国の踊りや歌、ビーズ細工体験などを通し、実際に女児たちと交流をした。彼女たちが見せてくれたタイ各地の伝統舞踊はとても美しく、私たちは見入ってしまった。そのお礼に私たちはソーラン節と日本語の Let it go を披露し、最後にはお互いの踊りを一緒に踊った。最初は恥ずかしく、緊張していたのか、お互いに距離感があったが、踊りの振付を教えあうことで自然と距離が縮まり、お互い笑顔で楽しい時間を過ごすことができた。

そのあと、彼女たちが施設で行っているビーズ細工や絵を描く体験、工芸品づくりなどを一緒に行った。日本語も英語も通じなかったが、ここでも交流を深めるこ

子ども達が描いたウェルカムボード。カラフルで可愛らしく、日本語も書いてある

とができ、それと同時に彼女たちの手先の器用さには驚いた。細かいビーズを組み合わせて綺麗な花模様のブレスレットをいとも簡単に作ってしまうのだ。私たちも体験してみたが、色の配色や糸の通し方が難しく簡単そうに見えてかなりの技術が必要だということに改めて気づかされた。それぞれの体験が終わると、彼女たちからフクロウの形をしたストラップを手渡された。これも手作りだということに驚き、同時に彼女たちの手工芸能力の高さには本当に感服した。この体験後、本来の予定ではこの施設の訪問は終了であった。しかし、女児たちの希望で、一緒に昼食を食べることになったのである。既に多くの体験をさせていただいたのに、なお温かいもてなしをしてくれることに感謝の気持ちと、まだ彼女たちと一緒に過ごせると思うと嬉しい気持ちでいっぱいになった。食堂に移動し、女児たち４、５人に対し私たちが１人というグループに分かれ早速食事をごちそうになった。メニューは具沢山のセンレック・ナーム（乾燥米麺にあっさりした透明のスープ）とデザートにスイカ。麺の方は薄味なので調味料を自分好みにかけて味を調節する。ここでもタイの食文化に触れることができ、食事をしながら私たちが事前研修で学んだ基本的なタイ語を使って彼女たちと楽しく話をすることもできた。初めのころの距離感は全くなく、ジェスチャーや簡単なタイ語でコミュニケーションをはかり、距離も縮まり非常に充実した時間を過ごした。食事後には私たちから日本食のプレゼントとお礼の言葉を贈り、ここでの活動は終了となった。帰り際も、彼女たちはバスまで手を繋いで私たちを送ってくれた。バスに乗ったあとも見えなくなるまでずっと手を振ってくれており、別れが本当に惜しかった。

子ども達と一緒にビーズ細工などの手工芸品作りを行う。青年海外協力隊の野村さんが子ども達に手工芸品のつくりかたを教えている

　このタンヤポーン女児保護センターでは、青年海外協力隊の方が実際にどういった現場で活動しているのかを視察することができたと同時に、様々な交流を通し、

彼女たちの心の温かさや元気な様子に触れ、タイの文化を理解することもできた。暗い過去があるはずなのに非常に明るく、皆のはじける笑顔が印象的であった。そして、私たちは彼女たちの持つ大きなパワーにも驚かされた。手工芸や絵画の能力だけでなく、私たちを笑顔にさせてくれる目に見えない大きな影響力だ。短時間でも別れが惜しくなるくらい充実した時間を過ごすことができたのも、彼女たちのおかげだと感じている。後日、野村さんから、私たちが歌った日本語 ver.の Let it go が子どもたちの間でブームになったという嬉しい連絡もいただいた。ここでの経験はお互いの心に深く残り、忘れられない思い出になった。そして私たちは、子どもたちがこれからも健康に過ごし、社会へと大きく羽ばたいてくれることを心から願っている。

タイ国家警察・戸島國雄氏の講演

経済学部公共･環境経済学科 1 年　野口 桃花

JICA 事務所への 2 度目の訪問で私たちは、元 JICA 専門家であり元刑事の、戸島国雄さんのお話を伺いました。2 時間の訪問では聞ききれないほど、戸島さんは多くの経験をされ、功績を残されていて、多少リスクを冒してでも自ら行動を起こすことの大切さを痛感しました。今回のお話では、戸島さん自身の警察官人生や、犯罪心理、発展途上国への訪問で感じたことを中心にお聞きしました。

JICA タイ事務所における戸島國雄さんの講演の様子

講義は、「癖」という言葉から始まりました。良くも悪くも皆「くせ」をもっていますが、犯罪者がまた罪を繰り返してしまうのは「へき」というそうです。性癖、盗癖は治らないということ、そして、拘置所で生活する人から「癖」を見つけ出し、それを手掛かりに 2 度目の犯罪や同じ手口の犯人を捜し出せるということは、警察組織に携わる人ならではの知識で、とても興味深く今も覚えています。

戸島さんは鑑識のプロであり、現在日本ではよく知られる似顔絵捜査や、事件現場のポリスラインの黄色いテープ張りを初めて行った方です。三島由紀夫事件や、日航機 123 便墜落事故、オウム真理教の事件など、ニュースで有名になった数々の大事件を担当してきました。1995 年、JICA 専門家となりタイ国家警察局科学捜査部に赴任してからは、タイの警察官に捜査の方法を教えてきました。もともと一人

一人のプライドが高く非効率であったタイ警察の捜査方法ですが、座学で教えるよりも実演で教えた方が興味を惹かれると気づいてから、戸島さん自身も彼らと一緒に現場に行き、日本で行ってきた方法を伝授するようになりました。現場に標識番号を付けて記録し、報告書を作成するという方法もタイに持ち込んだものです。それからも、タイでの殺人、強盗、火災、爆弾テロ、飛行機や列車事故などを担当しました。日本人も巻き込まれたバンコクのナイトクラブでの大火災は、地道に手で灰と瓦礫を取り除くという日本式の方法で火元を特定できたそうです。実際の事件現場の写真を見て、衝撃を受けました。火災で焼けた人が跡形もなく人に見えないような姿も、警察関係の仕事に携われば当たり前のように見ることになるのだと思うと、私たち学生は未知なことだらけなのだと思い知らされました。

スライドでタイの山岳民族の紹介をする戸島さん

他にも、泥棒の習性やオウム真理教の残酷さ、日本人が外国で狙われることについて、そして麻薬に頼る貧しい子供たちや、未開拓の民族を訪問した時の様子まで、写真を見せてもらいながら教えていただきました。

学生の中に、以前実際に空き巣に遭った時、思い返せば戸島さんが仰っていたようなやり方で荒らされたという経験をした人がいました。今回のお話で得た知識があることで、これから私たちの回りで何か起こった時に、少しでも心の余裕ができて落ち着いて行動できるのではないかと思いました。滅多に対面するようなことがない警察組織の方から生の写真を通して生のお話を伺えたのは、とても貴重な体験でした。戸島さんは、タイ警察を指導しながらも、タイ人の愛国心からたくさんのことを学んだそうです。国際協力は相互に影響し合ってこそ成り立つものです。これから私たちが社会に出ていくときに、グローバル化社会だからその波に乗るというのではなく、タイで身をもって見て聞いて感じたことを活かして、それを周囲に広げていきたいと思います。

JICA タイ事務所の会議室にて。前列中央が戸島さん

ハーモニーライフオーガニック農園

理工学部人間総合理工学科１年　池田 木綿奈

高校生の時、当初農学部への道を志望していたこともあり、元々生物系に関心があった。また日本の農業は「人体に優しい薬品」や「害をもたらさない遺伝子組換え」で発展していくと学んできた。このような経緯からプログラムとしては最終日の農園訪問に期待していた。図らずしも大賀さんの農業に対する哲学は私とは違った。化学肥料のみならず、科学の最先端である遺伝子組換え作物までも否定するものであったがために、私には肯定し難く、農園散策中に直接幾つかの反論と質問をさせていただいた。当然ながら大賀さんの回答にはそのいずれにも完璧な正当な理由があった。

オーガニック農法とハーモニーライフについて説明する大賀さん（右端）

特に印象的だったのは「『未知』という危険に敢えて立ち向かう必要はない」というものだ。確かに科学の発展には「未知」の物を扱い、実験を重ねる必要がある。それでも実験が足りず世の中に出てから厄介な副作用が判明する場合もある。「未知」というリスクを冒さずとも解決できる方法が「オーガニック農法」なのだ。強い信念と積み上げた経験からの答えがこの農園に集約されていることがわかった。安心安全にこだわったその結果が美味しい野菜に繋がるという仕組みだ。

巷では「オーガニック」を始め、「無農薬野菜」「有機栽培」などが同等に扱われているため、農家自体もその点に対するこだわりがないように感じる。そのことが原因で、日本ブランドの野菜は世界には通用することができない。それ故にオーガニックを究める大賀さんはタイに渡った。とはいえ、化学肥料に頼らないということは、人の手を多く使うということであり、自ずと生産量の低下と価格の高騰は否めない。大賀さんの夢である一般家庭での普及には至らない。大賀さんはそのことについてこう語られた。「世間の考えが変われば良い」と。世間の考えを変えるには農家が変わらねばならない。そのためには政治が、経済が変わらねばならない。これからの日本の農業に必要なのは今までの消費者の概念を変えるための啓蒙活動なのではと考えさせられた。

この農園は都会から遠く離れているため、バスから降りた時に肺に入ってきた空

気はとても澄んでいるように感じた。バンコクが毎日排気ガスで曇っているからなおさらのことだ。始めの挨拶で始まり、大賀さんによるオーガニック農業の説明と本農園の成り立ちの説明を受けた。地球の問題にも触れ、温暖化や水質汚染、生物の絶滅などいくつもの問題を解決できるのが「オーガニック」ということを説明された。

その後、農園内で栽培されているものの説明を受けながら農園散策をした。実際に植物に触れ、その後の昼食でそれらを食することで、学生は皆、命の恵みを目で、手で、舌で感じることができた。また大賀さんは「食事を残さないように」と添えられた。美味しいのはもちろん、命をもらっていることや、食事もできない貧困層の方々を思うと残せないはずなのだが、この研修中、大皿料理が多い上に小食の人も多かったために大量の食べ残しが出ていたのが現実である。それを反省し、皆でお腹に入る上限まで食べようと試みたのだが、やはり残す結果となってしまったのは悔しい限りである。

午後は農園で育ったハーブを使った石鹸の工房見学、「オーガニック」を支える肥料作成の見学や体験、農園のニンジンの収穫体験をした。9 日間共に過ごした皆が一緒に作業する顔には藁や土に塗れていても笑顔があふれていた。澄み切った空の下、多くのことを学んだ最後のプログラムだった。

畑でオーガニックのにんじんを収穫

３．参加者の報告

タイの衝撃

法学部法律学科１年　浅羽 正太

私がこのプログラムに応募した理由は３つある。１つ目は国際問題や国際関係に興味があるということだ。２つ目は人生の中で最も自由な時間があるときに普段はできないようなことをしたいと考えたことである。３つ目は大学が主催しているプログラムであるから初海外の私でも安全と考えたことである。

私が１０日間のタイの研修で学んだことは大きく分けて２つある。１つ目は格差の問題である。タイに行く前は、タイは発展途上国と先進国の間の中進国という位置づけであるということしか知らず、具体的な様子などは分からなかった。また、研修参加時にも、地方に滞在した研修前半と首都バンコクで滞在した研修後半ではタイに対するイメージが大きく違うものになった。

JICA タイ事務所から望むバンコクの街並み

初海外で身構えていた私にとって、地方での滞在は思っていたより、安心で安全な国ではないかとさえ思った。地方はビルのような建物は少なく、経済発展こそしていないものの、貧富の格差は私が思っていたほど、見られなかった。研修前半が進むにつれ、JICA や民間の支援団体はタイではなくもっと貧しい国で活動すべきだという浅はかな考えも生まれた。

しかし、首都バンコクでの研修が私のタイに対するイメージを大きく変えた。ここは東京なのかと感じるほどの高層ビルが立ち並び、道路には人、バイク、自動車で溢れ、それと同時にビルのすぐ近くにはボロボロの低い建物があり、ゴミが散乱し、地方とは別の国とさえ感じた。このようにバンコク市内を歩いているだけでも、貧富の格差が目に見えて分かったが、特にスラム街を訪問したとき、「貧富の格差」を強く感じた。スラム街に入ると、家々が密集しているため道は狭く、足場も整備されておらず、用水路からは異臭が漂い、とても人が暮らすような環境とは思えなかった。また、スラム街を見た２日前に訪問した「生き直しの学校」の子供たちもこういう所で育ったということは知識として知ってはいたが、実際にその現場を見

たときの衝撃は大きかった。同じバンコクという都市の中で、富裕層と貧困層の住んでいる場所は物理的には近い。しかし、それとは対照的に生活水準はほど遠い。高度な経済発展がもたらした煌びやかな高層ビルという「光」、「負の遺産」ともいうべきスラム街という「影」。「光」と「影」という２つの顔を持ったバンコクは、タイが抱える「中進国特有の課題」を私に教えてくれた。確かに経済を発展させることも大事であるが、「影」の部分を忘れず、良い意味で変えていくという点で JICA や各支援団体は必要不可欠だということが身をもって体感した。

クロントイ・スラム 子どもたちが遊ぶ空き地

２つ目は言語に関することである。前述の通り、海外渡航が初めての私にとって日本語以外の言語が飛び交う環境に身を置いたこともなく、毎日が刺激的であった。タイではタイ語が公用語であり、上流階級の人は英語も話せるという国であった。そのため、大学生との会話は英語、子供はタイ語といった感じであった。訪問先には日本語が使えるところもいくつかあり、そのような訪問先では意思疎通は容易であった。日本語が使えず、英語とタイ語が使える訪問先では細かい内容を伝えることはやや時間を必要としたが、大まかな内容は伝わった。１番苦労したのは、タイ語しか使えない訪問先である。タイ語に関しては「こんにちは」を意味する「サワディー・クラップ/カッ」と「ありがとう」を意味する「コープン・クラップ/カッ」しか知らない私にとって、会話は不可能に思えた。しかし、言葉が伝わらなくても、ジェスチャーやアイコンタクトを使えば簡単な会話は成立する。今回の訪問先の１つであるＡＰＣＤ(アジア太平洋障碍者センター)の方によると、人は会話をする時、ジェスチャーやアイコンタクトから受け取る情報は９割を占めるのに対し、言葉から受け取る情報はわずか１割程度であるという。実際に「生きなおしの学校」、「タイヤポーン女児保護施設」などタイ語しか使えない子供たちともほとんどジェスチャーやアイコンタクトのみで会話は成立した。

最後にこのプログラムはバンコクの他にも、チェンマイ、ランパーンといった北部の都市や町、カンチャナブリといった西部の町など観光などではあまり行かないようなところにも行くことができた。また、スラム街や JICA など個人では行けないような場所にも訪問した。観光であれば普通、バンコクとその周辺のみしか行けないと思うが、このプログラムではタイ国内を満遍なく回れるため、とても多角的な理解につながったと感じている。もちろん、王宮やニューハーフショーを見たり、水上ボート、水上バス、象に乗ったり、買い物や食事を楽しんだりと、観光も満遍

なく楽しめた。国際センターの小川さん、河本さん、タマサートの Teera さんをはじめとしたタイの方々、研修メンバーの皆さんのおかげであっという間だが、とても濃密であった１０日間を過ごせたことに感謝している。この経験を活かし、自分自身の学生生活もより一層頑張っていきたい。

刺激をたくさん受けたタイ研修

総合政策学部国際政策文化学科１年　網野 悠介

今回の 10 日間のタイ研修は私にとって、とても刺激があり実りある楽しい研修でした。本プログラムに参加した動機は中央大学入学当初から一年生のうちに海外に行くというプランを持っていたこと、学部の講義で海外を渡り歩いて来たジャーナリストの方の話を聞いているうちに国際協力についてとても関心が出てきたことの 2 点です。頻繁に c-plus や中央大学ホームページをみて、国際センター前の掲示物にもよく目を通し、留学や海外の渡航プログラムに対してアンテナを張って生活しているうちに本プログラムの募集に出会いました。

タマサート大学の学生と

研修プログラムの国際協力というテーマ、発展著しい東南アジアの中心地タイへの訪問、また渡航期間や予算の面でも自分に一番合ったプログラムだと思い応募を決めました。参加が決まり事前研修、ガイダンス、グループごとのプレゼンテーションの作成などを経ていよいよ念願の初海外になります。

本タイ短期研修プログラムは国際協力について学ぶための研修訪問、タイについて深く知るまたは純粋に楽しむための観光が絶妙に混じりあったプログラムであると今振り返りつつ感じます。訪問先の施設は国際協力に関心がある人ならば刺激を受けること間違いなしの施設です。タマサート大学の訪問では海外の同年代の人たちとの交流をとおし楽しめると同時に、自分の語学力のなさを痛感し帰国後の言語学習へのモチベーションにつながります。JICA や APCD(アジア太平洋障害者センター)など国際機関への訪問は実際に国際社会で活躍されている方々の話を聞くことで国際社会に貢献する仕事に対しての憧れを抱き、生き直しの学校、タイヤポー

ン女児保護センターでは現地の子供たちからたくさんの元気をもらいつつ貧困の子供たちが置かれている現実も知りとても考えさせられます。観光は見て楽しむのはもちろんですが、現地の人との値段交渉からガイドさんとの交流、そして一緒に研修に参加した仲間や引率してくださった国際センタースタッフとの交流など楽しいこと、得るものがたくさんありました。

自由行動で訪れた王宮にて

海外への単純な興味のままに参加したタイ研修プログラムでしたが自分の今後の道筋を少し示してくれたような気がします。将来国際系の仕事に就ければと思い中央大学総合政策学部に入学してきましたが、今回の研修で国際協力の仕事に少し触れられたことで自分のやりたいことが少し明確になってきたような気がします。特に本プログラムで事前から楽しみにしていたJICA、APCDへの国際機関の訪問で得たものが大きかったです。JICAタイ事務所ではタイで日本がどんなことに貢献しているのかを中心にお話をいただきました。日本の技術で飲める水道水が可能になったこと、電車のシステムごと導入することなどのインフラ面から青年海外協力隊による教育支援、高齢化に伴う医療制度の検討など様々な面で貢献していました。APCD も JICA の支援で作られた組織であり、障害者コミュニティーのエンパワメントがASEANに影響を及ぼすまでになっていてアジア社会に多大な効果をもたらしていました。実際に国際協力によってタイ国内、世界を動かしている人たちのお話はとても刺激的でした。またJICA のタイ事務所で長年働き今回の研修の引率してくださった国際センターの方が行く先々の訪問先で感謝のまなざしでもてなされていたのもとても印象に残っています。こういった人国際協力の最前線で働く人たちにあこがれを抱くと同時に、自分も将来日本が世界に貢献することに少しでも足しになれる人材となるよう大学でさらに学び、成長できるようにと決意を新たにする研修となりました。最後に本プログラムを計画、引率してくださった国際センターの小川さん、河本さん、現地で研修に協力してくださりとても親切にしてくださったすべての人たちに本当に感謝しています。

感想

理工学部人間総合理工学科１年　池田 木綿奈

海外ボランティアとは一体何なのだろう。
自分の育ってきた環境の中でボランティアは日常的なものであった。自分の通っていた学校がボランティア活動に協力的だったこともあり、大層な感じで取り組むものだとの考えがなかったのだ。ただ大学に入学後しばらくして自ら動かないとボランティアとは縁がなくなってしまうことに気づき、大学内の東日本大震災の復興支援団体において活動することとした。日本が直面している大きな課題について大学生として学術的に貢献できることに意義を感じ、だからこその「学生の国内ボランティア」に活動意義を感じていたのだ。上記を踏まえ、自分にとって「学生の国際ボランティア」は具体的な目的を見出せないボランティアであり参加する意義を見つけられずにいた。現在も国内には助けを必要としている方が多くいるのにもかかわらず、文化も違う、言葉も通じない海外に目を向けてしまうのが背徳的な感じすらしていた。しかし世の中では大学生だからこそ国際ボランティアを推す声もあり、現に私の周囲にも国際ボランティアに頻繁に参加する人がいる。何故そこまで惹きつけられるのか実感するためにこの研修への参加を決めた。

生き直しの学校にて

以下は参加したうえでの感想だが、当初想定していたボランティア活動というよりは実際に活動している方々と接する機会を得たことで彼らの目を通したボランティア活動を体験する以上に現実的に受け止め感じることで濃密な時間を過ごすことが出来た。貴重な時間を割いて、未熟な私達に懇切丁寧に現状や直面する課題をご教授してくださる姿はもちろん、様々な課題に苦労していながらもやりがいを感じ、そこからくる充実で満たされた笑顔には魅了された。自分も現地の子供と交流する活動を通して、何の苦労もなく育ってきた学生の自分には計り知れないほど大きな苦労を背負った彼らのことを知るにつれ、胸が締め付けられそうになった。そして屈託もなく笑いかけてくれる彼らにこんな私でもささやかながら何かできるのではないかという考えにいたった。とはいえ、日本にも同類の施設は多数存在

する。何故敢えてタイで活動するのか自分のなかで混乱していた。そういう私に研修に同行してくださった小川教授が教えてくださった。

「『何処でボランティアするか』よりも『どうしてボランティアがしたいか』が必要なわけであって、支援する本人が『継続して活動したい』と思えれば場所は何処でもいのじゃないかな？」

この一言が私の中で大きな気づきであった。自分が勝手に国の違いというだけで大きな線引きをしていたのではないか。文化の違いということから考えれば、日本国内にも存在することであり、言葉が通じる状態でも気持ちが通じ合わないことはよくあることだ。渡航経験が今までないがためにいつの間にか考えが小規模のものとなっていたようだ。グローバルな考えは当然であるうえに、大学生の自分が国外国内の差は無く、何処で活動し何を学んでくるかが大事なのだ。

今後は人間総合理工学科において将来「理工系人材」としての社会貢献をライフワークとすべく、今回の学びや活動を結びつけ、これからに活かしていきたい。

初めての海外ということもあり、目に映る景色、排気ガスが充満する都心、異国の言葉が飛び交う街角、何もかもが刺激的だった。特に言葉の違いはもちろん、その壁を乗り越えて通じ合えた時の喜びは忘れられない思い出だ。とはいえ以上のことはただの旅行でも感じられること。この研修ならではといえば、観光では決して入れないであろう人や場所に引き合わせてもらえたことといえるだろう。その１つとして、身分証明することもできない貧困層の生活を間近で見たこと。テレビや新聞などメディア媒体を通じての知識はあったものの、実際に訪れることで、目で見て肌で感じることで今までとは違う痛烈な衝撃を受けたのだ。スラム街は女子１人で行くのには相当の身の危険を感じてしまうが、大学の保護の下だからこそ経験出来たと思っている。その時のスラムの用水路から漂う異臭はひと月経つ今も鼻の奥に残っている。

クロントイ・スラム　こども達と遊び場

この 10 日間、現地の大学生との交流から JICA や NPO 団体の訪問、その上施設での活動まで行え、自分の予想を超えるほどの充実であり得たものは計り知れない。また JICA の方と個人的に長時間お話できたのもとても貴重な体験だった。最後に一緒に行った参加学生皆と過ごした時間はかけがえのないものとなった。この研修を企画してくださりありがとうございました。

タイ短期研修プログラム活動報告

経済学部経済学科３年　小林 昂史

Ⅰ.　参加の動機

「海外に行きたい、何かやりたい」

国際協力やボランティアの分野に興味があったというより、単純に海外で何かしてみたかったというのが参加のきっかけです。英語の勉強が好きだったので、漠然と英語を使って実際に海外の人と交流してみたいと思っていました。同時に大学生活で特に何もしておらず、この研修に参加したら何か変わるのではないか、という期待も抱いていました。

当時はタイという国に関して「暑そう」、「料理が辛そう」くらいのイメージしかありませんでした。しかし、実際にタイに滞在してみて良い意味で期待を裏切られることが多々あったと思います。

Ⅱ.　感じたこと、考えたこと、研修参加前後で変わったことなど

一週間弱という短い期間でしたがとても有意義な時間を過ごすことができました。バンコクはとても活気があり、経済的にも成長しているのを肌で感じることができました。予想以上に道路などインフラが整備されており、走っている自動車はトヨタや日産など日本のメーカーのものばかりでした。街中やショッピングモールの中では日本のコンビニや日本食の店を見かける機会が多々あり、日本の食事や文化が浸透しているようでした。高層ビルや大きなショッピングモールが立ち並ぶ中で、道端に屋台が並んでいたのが、大都会の中でもタイらしさを感じさせるところだと思いました。

「暑い」、「料理が辛い」というのはやはり想像通りでした。辛い物やパクチーが苦手なので、タイ料理をあまり食べられず残念でした。かなり甘いものもあり好みがはっきりと分かれると思います。

タイの学生に関しては、勤勉でまじめ、人当たりがよくフレンドリーな印象を受けました。アルバイトやサークル活動はほとんどせず、学業に集中するという点が日本の大学生との大きな違いだと感じました。互いに英語のレベルがまだまだで、うまくコミュニケーションが取れませんでしたが、積極的に話しかけてきてくれてとても助かりました。日本のことを聞かれて答えられなかったのが心残りです。

「クロントイ・スラム」や「生き直しの学校」は個人的にかなり衝撃的でショックでした。今まで特に不自由なく生きてきたので、貧困や教育が十分に受けられない状況など社会問題を直に目にすることができ貴重な経験になりました。「生き直し

の学校」の子供たちは、親が麻薬取引に関わっていたり、虐待を受けていたり、辛い経験をしてきているはずなのに笑顔で迎えてくれました。言葉は通じませんでしたが、良い思い出になりました。

当初はタイという国についてはほぼ何も知りませんでしたが、タイを訪れ、現地の人たちと関わる中で、異文化交流の魅力に気づくことができたと思います。タイに限らず海外の文化について関心が持てるようになったことが収穫だと思います。個人的には、元々かなり内向的だったのですが、自分からコミュニケーションを取ろうとする姿勢も少しは身についたと思います。またぜひタイを訪れたいです。

タイ研修

経済学部国際経済学科１年　小山 正恵

今回私は短期研修として２月１１日～２０日の１０日間タイに行きました。このプログラムに参加したきっかけは、私自身もともと発展途上や貧困という問題に関心があり、今回のプログラムでは、タイの経済発展の裏にある貧富の格差などについて、実際に自分自身の肌で感じることができると思い、参加を決意しました。

タイは今や中進国と言われるまでに発展しましたが、その裏では、急激な発展により貧富の格差がひろがり、首都バンコクでは高層ビルのすぐ隣に多くのスラム街がひろがっているというのが現状です。スラム街はとても空気が悪く、また、においも腐敗臭のようなものがし、テレビでは何度か見たことがありましたが、実際に訪問してみると、こんなところに人が暮らしているのかと改めて驚愕し、ショックを受けました。そのスラム街には、出生届がなく、学校に通うことができない子どもたちがたくさんいて、私が訪問したスラム街にもそういった子どもがいました。そういった子ども達に教育の機会を与えるために設立されたのが、今回私が訪問した先のひとつであるドゥアン・プラティープ財団です。初めは自宅の一室に小さな教室を開いたのが始まりですが、今となっては多くの生徒を抱える立派な学校として、スラムの子供たちの大事な教育の場となっています。

また、私たちは生き直しの学校とタンヤポーン女児施設というところも訪問しました。生き直しの学校はチュンポーン校とカンチャナブリ校があり、私たちはカンチャナブリ校を訪問しました。そこでは、5～20 歳までの女の子達と 5～12 歳までの男の子たちが共に暮らしており、家庭内暴力や親が子どもを育てられない状況、親がすでに亡くなってしまっている子ども達を保護しています。ここでは、農業やパン作り、石けん作りなど様々な体験・職業訓練を通して子どもたちの社会復帰を

目指しており、自分たちの生きる意味とは何なのかを改めて実感していくことを目標に毎日を送っています。私たちは今回、生き直しの学校の子どもたちと一緒にバドミントンや折り紙をしたり、踊ったりもしました。一緒に過ごす時間は本当に楽しくて、あっという間に時間は過ぎ、お別れの時には「また会いに来て」と言ってくれ、その言葉に本当に胸が熱くなりました。

タンヤポーン女児施設では、6～18 歳までの、家庭内暴力や性的暴行などを受けた少女たちが共に暮らしており、心のケアや体のリハビリ、また、社会復帰を目指して様々な職業訓練を受けたり、学校に通ったりしています。ここでは、タイの地方ごとの色とりどりの民族衣装でその地方ごとの歌や踊りを披露してくれ、とてもきれいで素晴らしいものでした。その後、一緒に職業訓練を体験したり、お昼ご飯を食べたりしました。その中で、一緒に作業をしたある女の子が「自分にとって一生の思い出になった、名前を教えてほしい」と聞いてきてくれたと聞いて、私は心の底からうれしく思い、本当に感動で胸がいっぱいになりました。

タイ全体としては経済も発展し豊かになってきてはいますが、一方で貧富の格差は拡大していき、国籍を持たない子ども達も多く存在し、地方では麻薬密売や人身売買などの犯罪が後を絶たない状況です。そんな中でも、親を亡くしたり、家庭内暴力などによって心に傷を負ったりした子どもたちは、そのような背景があるにもかかわらず、本当に笑顔がきらきらしていて、とても人懐っこくて、私はその笑顔にとても心動かされました。

今回の研修を通して、どうしたらこの子たちの笑顔を守れるのか、また、今学生の自分にはいったい何ができるのかを改めて考えさせられました。自分が将来進むべき道として、このような人たちの力になれる道に進みたいと強く思いました。今回のタイ短期研修は、私にとってとても良い経験になりました。

タイ短期研修プログラムを通して

法学部法律学科 3 年　佐藤 真子

このプログラムに参加して良かったと心の底から思います。各地に赴き、自分の目で見て、聴いて、国際協力の現場を体感することができました。それと同時に、自分の視野の狭さを思い知らされました。日本だけでなく、世界中で数多くの社会問題が起きています。その問題を解決するために、JICA や生き直しの学校、タンヤポーン女児保護センターをはじめとする数多くの機関が、取組みを行っています。また、このような貴重な体験をすることができただけでなく、多くの出会いやタイの人のやさしさに触れた 10 日間でもありました。

ワット・プラタート・ランパーン・ルアンにて

私は、このプログラムがおわった 4 月から大学 4 年生になり、就職活動が本格化します。3 月から解禁する就職活動の前に、自分のしたいことは何なのかをきちんと考えようと思っていた時にこのプログラムの募集を見つけました。今まで国内でのボランティア経験しかなかった私は「海外ボランティアってなんだか面白そう」そんな気持ちでこのプログラムに応募しました。

結果として、自分の想像以上の体験をタイですることができました。このプログラムに参加する前まで、タイのイメージは「それなりに発展している」という漠然としたものでした。始めは、タイの歴史や文化に触れ、空港やショッピングモールなどタイの豊かな面を見て生活していたので、タイっていい国だなと思って過ごしていました。しかし、タイに滞在する日数が増えていくにつれ、多くのことを考えるようになりました。

今回のプログラムでは、子どもたちと関わる機会が多くありました。生き直しの学校やタンヤポーン女児保護を訪れた際には、麻薬取引に巻き込まれたり、虐待を受けたりした子どもが多くいることが分かりました。特に女児に対する性的虐待が深刻な問題となっているとお聞きしました。子供たちの笑顔からはそんな暗い過去を想像することができませんでした。

スラム街を訪れた際には、普段なら学校へ行くべき時間に子どもたちががらくたの中で遊びまわっている姿に衝撃を覚えました。日本のテレビや本でスラム街の風景を見たことは何度かありますが、自分の身近で起きているわけではない他人ごととして捉えていました。しかし、スラムに足を踏み入れた際の異臭やゴミ、風景を自分の目で見て感じたことによってこの状況がどれだけ深刻なものであるかを実感しました。タイが発展を遂げ、豊かな暮らしをする人々の一方で、貧困に苦しめられている人々がいることを目の当たりにした瞬間でした。

クロントイ・スラムの空き地で遊ぶ幼児

このプログラムを通して、タイの良い面も悪い面も見ることができました。課題はまだまだ数多くあります。しかし、悪い現状をそのままにするのではなく、苦しんでいる人々を少しでも助けることができるように、多くの機関の支援があることもわかりました。タイ国内だけでなく、JICA をはじめとする日本の機関もそこに携わっています。日本は先進国として発展途上国を支援していく立場なのだと再認識しました。そこで大切なことは、日本が主役になるのではなく、途上国の方々が主役であり、あくまで日本はサポートをする側であるという意識が大切であると実感しました。その国の人々が変わらなければ根本的な問題は何も解決しないからです。

これからの人生の中でも、国際協力に携わっていきたいと強く思えるようになった 10 日間でした。

タイ研修で学んだこと

経済学部公共・環境経済学科２年　立川 貴子

タイは今まで行ってみたい国でもあり、私は貧困国に興味があったためこのプロジェクトに応募しました。

行き直しの学校では親に問題があり、親の元から離れて暮らしている子供が暮らしています。彼らはとても素直で、心優しくて、いつも笑顔で一緒に遊んでいて楽しかったし、彼らから学ぶことが多くありました。また、彼らの先生は暗い過去を持つ子供たちが元気に楽しく暮らせるように、一人一人と向き合い、心のケアをしていると言っていました。生き直しの学校ではお互いに信頼関係があるなと思いました。ボランティアとして生き直しの学校に行ったけれど逆に自分が子供たちの笑顔に元気をもらいました。

スラム街の見学の時は本当に衝撃を受けました。バンコクはタイの首都でありとても栄えていました。けれど少し出るとスラム街が立ち並び、貧富の差を感じました。今まで、テレビや写真、教科書などでスラム街の存在やその情景は見たことがあるけど実際に行って見るとその深刻さは予想以上でした。一目でわかるほど暮らしは貧しく、町は不衛生で、異臭が漂っていました。バンコクの栄えているところとスラム街の貧富の差は想像以上に大きくすぐにでも解決すべき問題だと思いました。スラム街に住む子供たちにインタビューした際、学校に行っていない子供、怪我して病院に行っていない子供がいました。それでも彼らは楽しそうにバスケットボールをしている姿に何も言葉が出てきませんでした。私はスラム街を見学しただけで、今すぐにでも解決できる問題がある中で何もできない自分がとても悔しく

無力に感じました。今後、私はこのような問題に貢献できるような仕事に就きたいと思いました。

タイの大学生との交流では、同世代のタイの学生とコミュニケーションをとることができてとても楽しかったです。しかし、自分の英語力の低さや、日本のことについて何も知らない自分、問題に対して何も意見を持っていない自分に気づきました。タイの学生は、英語は流暢で、国の問題に対して真剣に考え、その問題に対して自分の意見をもち、国が成長するために、また個人のスキルアップのために勉学に励んでいました。私は彼らと比べたとき、大学に入ってから特に目標もなく場合とばかりしてきた自分を情けなく感じました。タイの学生に友達もできて日本に帰国してもメールのやり取りをすることができて、とても嬉しいです。

タイ人は基本的にフレンドリーで優しくてとても素敵な国だなと思いました。タイ料理は今までほぼ食べたことがなかったため、最初は抵抗がありました。案の定、パクチーはとても苦手で食べることはできなかったけどそれ以外のタイ料理は本当に美味しくて、ますますタイの魅力を感じました。

この研修ではタイの良い点や問題点を見ることができて世界が広がりましたし、とてもいい経験がこの１０日間でできました。また、タイと比べることによって、今の日本、自分を客観的に見ることができ自分の無力さに気づくことができました。この経験を糧にこれからも頑張っていきたいと思います。

タイ短期研修１０日間で得たもの

文学部人文社会学科２年　田邉 ちひろ

２０１６年２月１１日から２０日の間、私たちはタイ短期研修プログラムに参加した。私は以前友人と観光目的でタイを訪れたことがある。その時に、東南アジア独特の活気あふれる雰囲気を味わうことができる一方で、栄えた都市部に垣間見える貧困者の様子を目の当たりにした。また、日本と異なる文化やタイの方々の温和な性格にも触れた。それらは非常に刺激的で、私はこの国に惹かれると同時に沢山の「なぜ？」が生まれた。それから、タイに関心を寄せるようになり、もっとこの国の現状、文化、歴史、様々なことを知りたいと思った。これが、私がこのプログラムに参加した理由である。そ

ワット・プラタート・ランパーン・ルアンに収められた仏像

してこのプログラムを終え、感じた三点のことについて述べたいと思う。

まず、私が同じ大学生として驚かされたことは、タイの学生の学びに熱心な姿と堪能な英語力である。２日目に北部の町ランパーンにあるタマサート大学を訪れた。まず、お互いの国や大学についてのプレゼンテーションを行い、その後同性婚についてディスカッションを行った。タマサートの学生は発言にも意欲的で、自分の意見を英語で流暢に述べており、私は非常に驚いたと同時に自分の英語力がいかに儘ならないかを痛感した。お互いに英語は第二言語であるが、その熟達度には大きな差があると感じた。しかし、同性婚やＬＧＢＴに対しての熱心な思いはどちらも同じで、国を超えて意見交換をできたことは非常に有意義であった。タマサートの学生のそういった姿に感化され、自分自身の学びに対する熱意や、もっと世界を知りたいという思いが強まったのは確かである。

次に、日本と大きく異なると感じた点として、宗教に対する思いや国王を敬う心について述べたい。以前旅行に訪れた時にも、国王の肖像画や日本でいう仏壇のようなものが街の至るところにあるということに気づいてはいた。しかし、実際にこのプログラムを通して現地の方々と交流を深め、改めていかに日常生活に宗教が根付いているかを感じることができた。２日目の夜、タマサートの学生と夜の屋台街を歩いていると、そのうちの１人が何気なく道を外れ、石でできた仏壇のようなものに、手を合わせていた。尋ねると、お祈りをしていたそうだ。そして、私たちは様々な物に神が宿っていると考えている、とも言っていた。こんなにもごく自然に、しかも若者にも、宗教が日常に溶け込んでいることには驚いた。また、街中でよく見かける黄色の旗は、国王が生まれた月曜日にちなんでおり、月曜日のシンボルカラーが黄色であるからだそう。このように曜日ごとにシンボルカラーが決まっており、国王や自分の生まれた曜日を重要視する習慣は日本にはない。日本と異なる宗教観や考え方に触れ、タイらしさを感じるとともに、今まであまり気にしたことのなかった宗教に対して理解が深まり、興味が沸くきっかけにもなった。

生き直しの学校で　子どもたちと

最後に、私がこのプログラムで最も心を打たれ、感服したことは、タイの人々の温かさである。このプログラムで出会ったタイの人たちはとにかく明るく笑顔であった。生き直しの学校やクロントイ・スラムに暮らす子どもたち、ＡＰＣＤで働く人々など、暗い過去や辛い経験を抱えているはずの人ほど笑顔が眩しかった。また、行く先々で私たちに手厚いもてなしをしてくれた。元からあった予定に付け加える形で、食事であったり伝統工芸の体験で

あったり、タイを感じることが出来る体験をたくさんさせてくれたのである。時間を割いて私たちのために様々な準備をし、もてなしてくれたことに感謝の気持ちでいっぱいになった。さらに、そういった人々の笑顔や明るさを感じながら交流をした時間は、深く記憶に残り、今でも私たちにタイでの経験を恋しくさせている。日本に帰ってから、私なりに、なぜこんなにも彼らが笑顔を絶やさなかったのかを考えた。それは、私たちの当たり前が彼らにとっては大きな喜びと幸せであるため、ではないかと推測した。普通に呼吸をし、生きられていること、自分の気持ちを相手に伝え、相手から返事が返ってくること、友達や自分を支えてくれる誰かがいること、食事ができること、学校で学べること。こういった私たちにとって当たり前の生活が、いかに幸せであるかを彼らは理解していたように思う。このプログラムでの様々な交流で彼らと時間を共有したことにより、それに気づかされた。日本ではなかなか感じることのできない思いに気づかされ、心に染み、タイの人々の温かさ、明るさ、笑顔は一番印象深いものになった。

このプログラムは私にとって非常に価値のある貴重な体験となった。多くの驚き、興味、感心、感動をかき立て、タイという国に対する知見を広げることができた。そしてこのプログラムを終え、私が得たものは本当にたくさんあるが、その中でも特に、何事も柔軟に受け入れる力と知ろうとする探求心が非常に大きくなった。以前からタイに関心を寄せていたが、さらにこの国に惹かれ、また訪れたいという気持ちがより一層強まった。将来的には、お世話になった人たちに少しでも恩返しができるように、タイをはじめとする東南アジアに携わる仕事をしたいと思っている。終わりに、共にこのプログラムに参加した仲間たち、先生方、ガイドの方、関わってくださった全ての方に心から感謝しています。貴重な経験を本当にありがとうございました。

タイ研修

法学部法律学科１年　知念 竜馬

私がこのタイでの短期研修プログラムに参加した理由は、将来は国際協力に携わるようなことをしたいと考えているので何かきっかけになればと思い、今回のプログラムに参加しました。また、時間のある学生時代のうちにたくさん海外に行きたいと考えていたのも理由の一つです。

私がタイに来て驚いたことは、やはり、私の想像以上に発展しているということです。プログラム参加以前はタイと聞くと、あまり発展していなくて少し貧しい国というのが私のタイのイメージでした。事前研修などであらかじめタイについ

て調べていくうちに私のイメージとは少し違うなと感じましたが、実際にタイに行ってみると、首都であるバンコクは高層ビルなどの建物がたくさん立ち並び、電車やモノレールといった交通機関や車の交通量の多く、非常に発展していてとても印象的でした。バスの中から見るバンコクの景色に圧倒されたのを覚えています。しかし、ビルが立ち並ぶ都心から少し外れたところに今回訪問したようなスラムがあり、同じバンコクでもこれほどの貧富の差があるのだということを実感しました。タイにもスラムがあるということは知っていましたが、想像以上に発展している風景を目の当たりにした後だったので、都心とスラムのギャップはより大きく感じられました。

カンチャナブリ　「戦場にかける橋」クウェー川鉄橋にて

研修の半分ちかくをバンコクで過ごしましたがチェンマイやランパーンにしても、とても活気のある街だなと思いました。特にバンコクにはいろいろな国からの観光客が多く、標識や案内はいくつかの言語で表示されていました。アジアンティークや王宮は観光スポットとして有名なので多くの観光客で賑わっていました。また、日本ではお祭りの時しか出さないような屋台やお店、バザールなどが訪問した先々で開かれていて、タイでは日常的なものだと聞いて驚きましたが、私にとっては毎日が祭りのような気分でした。このように活気があって楽しめる国だなと思いました。タイで研修した 10 日間でタイの国民性にも触れることができました。「微笑みの国」であるタイの人々は、やはり、笑顔が多かったような気がします。屋台などで買い物すると笑顔で受け渡しをしてくれたり、私が日本人観光客であることを知ると簡単な日本語でお礼をいってくれたりと、とても親切にしてくれたのを覚えています。さらに、普段の仕事中に作業をしながらよくお菓子など甘いもの食べるという話を聞いて、真面目な日本人とは違ったのんびり穏やかな性格は面白いなと思いました。食べ物に関しても、地方によって伝統料理があり、さまざまなタイ料理を楽しむことができました。タイ料理はとても辛く、逆に、お菓子などはとても甘いというのがタイの食べ物の印象です。唐辛子やパクチーなどあまり口にしない香草やスパイスは独特なものが多く、初めて食べるものばかりでした。本場のタイ料理を食べることができて良かったです。

研修では、生き直しの学校や女児保護センターで子供たちと触れ合う機会があ

りました。最初、私は子供たちに対して、彼らには親がいなかったり離れて暮らしていたりするので、悲しみや同情といった感情がありました。しかし、私たちがバスを降りた瞬間に走ってきた子供たちを見ると、そんなものは感じられませんでした。歓迎から別れるまでの間、ずっと元気よく私たちと遊んでくれました。彼らの方が辛い立場であるはずなのにその明るい姿に、逆に私たちの方が元気と勇気をもらいました。そして、将来はこのような子供たちのためにも力になりたいと思いました。

今回のタイ研修プログラムは 10 日間とあっという間でしたが、とても充実した研修内容で貴重な体験をしました。タイ研修を通して、現地でしか知り得ないことも学び、また一つ視野を広げることできたので、今後の大学生活に生かしていきたいです。

夢への一歩

法学部政治学科４年　富井 佳織

唯一の 4 年生である私が、なぜこの時期にこの研修に参加したのかという経緯と、研修で得たものについて書きます。

まず参加に至った経緯についてです。ちょうど私は就活が一段落し、内定先の企業に行くかどうかで悩んでいました。授業や、入学当初から続けていたボランティア活動を通して、貧困問題や国際交流のおもしろさ、大切さを感じ、ゆくゆくは利益を追求する企業よりも、そういった公益に携わる団体で働きたいと考えていました。しかし国際協力にはいろいろな形があり、企業の働きもそれに大きく貢献していることや、自身の経験の少なさで本当の協力はできないのではないか、それならいっそのこと就職をやめて現地で経験を積んだ方が良いのではないか、と考え、何も決められないままの状態が続いていました。そんなとき国際センターで相談に乗っていただいたのがきっかけとなりました。社会人として企業で働くことは世の中の仕組みを知ることであって絶対無駄にはならないし、仕事とやりたいことを分けてやることも双方のモチベーションを保てるという面でそれも一つの方法だということを教えていただきました。大学を卒業する前に、タイという国の文化や状況を実際に見ることや、そこで見学する団体や人との出会いなどを経験して、将来国際協力の舞台に立つためのつながりを作りたいと思い、このプログラムに参加することを決意しました。

次に、研修を通して考えたことや今後のことについて書きます。正直、まだ１年生だったら良かったなと何度も思いました。今回見学した施設でのインターンや

ボランティアなどやってみたいと思うことが次々浮かんだからです。ただ、わたしにとっては今このタイミングだったのだろうと思います。良い企業に就職することだけが目的なのではなく、自分のやりたいことを模索したり挑戦したりすることが本来あるべきなのだという言葉に強く共感しました。私は自分のできることで、世界のフィールドで役に立ちたいです。今私がやるべきことは、仕事を一生懸命やって自分を磨き、役に立つ人材になること、そして途上国の貧困問題、特に子どもに関わる活動をすることです。それは実際に見ること、活動に参加すること、知識を得ること、イベントに参加することなど様々な方法があります。

生き直しの学校にて

この研修に参加しなかったら、仕事の忙しさにかまけて、夢は即座に諦めていたかもしれません。目標を確信できたことが、今回の研修で得たものです。

様々な場所を見学させていただきましたが、その中で特に２つの場所をピックアップして書きたいと思います。

１つ目は「行き直しの学校」です。タイでは麻薬犯罪が蔓延しており、ここはその被害に合ったこどもたち（薬を運ばせられたり、親がこどもを育てられなくなってしまったりする。）を受け入れる施設です。先生たちは親代わりになって一緒に過ごし、生活面から学習面、職業訓練までを教育し、支援しています。最初に子どもたちに会ったときは、ダンスを披露してくれたり、彼らが育てた花の束をくれたりして私たちを歓迎してくれました。その後別室で先生方から子どもたちの背景を聞かされ、施設に来た当初は今のような表情を見せることはなく、おびえたり何も話さなかったりしたという様子を教えてくださいました。そんなことを聞いた後の子どもたちとの関わり方に戸惑っている学生もいたと思いますが、実際遊んでみると、とても元気な子どもたちにつられて笑顔いっぱいで、みんな楽しそうでした。

水上マーケット　船で揚げバナナを売る

やはり、子どもは素直です。どんな状況、背景があったとしても、日本にいて

も、タイにいても、楽しく遊びたいのです。それができない子どもが存在してはいけない、もしいたら助け出してあげないといけない、元気いっぱいの笑顔は守らなければいけないと強く思いました。この施設はとても意味のある重要な場所だと感じました。

２つ目は「クロントイ・スラム」です。東北タイの農村部から職を求めてバンコクにやってきた低賃金労働者が、コミュニティーを作って集住しているところです。実際見学をしてみて、本当に驚きました。行く前に予想していたより発展していたバンコクのビル街のすぐ裏は、日本では見ないような粗末な家が立ち並んでおり、その間はすれ違うのが大変なくらいのせまい間隔しかありませんでした。側溝には汚れた水がたまり、子どもたちは瓦礫だらけの空き地ではだしで遊んでいました。一人の男の子が学校に行くために ID 取得の手続きをするから、といって彼の母親のところに連れて行ってくれました。暗い部屋の奥からでてきた疲れきった母親の顔を見た時、とてもショックを受けました。その男の子の父親はいません。兄弟は複数いて、まだ小さな子もいました。母親の様子をみて、きっと彼女は生活が手一杯だし、子どもたちも十分な愛情が注がれていないのだろうと思いました。生きていることがしんどいように見えました。結局手続きは、疲れているから無理だと断られていました。

私は研修中、いろんな所に行くたびに風景やみんなの写真を撮っていましたが、クロントーイでは撮ることができませんでした。なぜならそこは彼らの生活圏で、日常であり、部外者である私たちがジロジロと見て回ること事体嫌な気分になるし、ましてやそれを写真に収めることなどできないと思ってしまったのです。他の学生たちの雰囲気も変わりました。口数が減り、少し険しい表情になっていました。どんなことを話して、どんな表情でいるべきなのか戸惑いました。そんな中お互いに話したのは、こういう現状があるということをより多くの人が知ることは改善への第一歩であるし、自分と比べるのではなく、敬意をもって接す事が大事だと言うことです。これは国際協力に関わっていく以上これは必ずぶつかる問題です。こうした学生との意見交換も私にとってはとても有意義で、良いヒントを得ることができたと思います。

最後に、この研修に参加できて本当に良かったです。現地で見て感じたことは自分だけのもので、一生の財産になりました。それになによりもたくさんの人と出会えたことです。現地の方々はもちろんのこと、いろいろな目標や考えを持っている学生のメンバーや、目標にしたい人生の先輩方とたくさん話せたことが嬉しかったです。ありがとうございました。

新しい発見、美しい国タイ

経済学部公共・環境経済学科１年　野口 桃花

私が日本以外のアジアへ行ったのは、今回のタイ研修が初めてでした。それまで周りの人が言っていたように、タイという国は本当に美しいです。でも、美しいという表現が指しているものは、実際に行く前に思っていたものとは少し変わったように思います。

生き直しの学校の子どもたちと

今回、10 日間の短い期間でしたが、中身は濃くていろいろなタイを体験できたと思います。プライベートな旅行ではなかなか足を運ばないような、子供たちの保護施設、スラム街、障碍者センター、オーガニック農園、そして JICA 事務所などへ行くことができ、とてもよい機会を与えられたと思います。

その中で特に、子供たちの施設「生き直しの学校」「タンヤポーン女児保護センター」「ドゥアン・プラティープ財団」への訪問で、発展途上国の現実が垣間見えました。子供たちが背負ってきた背景にどう向き合えばよいのかわからず、訪問する前は不安だらけでした。タイに着いてから気づいたのは、思っていたよりも治安が良くない場所があったのと、同じバンコクの市内なのにスラム街と高層ビルが並んでいたことで、同じアジアにあるはずの日本とのギャップがあまりに激しくて驚きました。しかし子供たちとの触れ合いを通して、生きるための原動力が何なのか気づかされました。子供たちに出会うと、みんな笑顔で私たち学生に近寄って来てくれて、とても元気で健気な子が多かったのです。辛い過去を背負った子が多いはずなのに、彼らは自分のことは自分でやることを施設で学び、将来は自分で生計を立てられるように職業体験もしながら勉強をし、心は私よりも大人なのではないかと思ったくらいです。

タマサート大学にて地域の女性の皆さんに手工芸を教えていただきました

一緒に外で遊びながら、その子たちから明るさと優しさをもらえて、彼らもまた私たちから愛をもらったと言ってくれて、なんて素敵な心を持っているのだろうと思いました。

それに、スラム街に住む人々も、自分がどんなに貧しかったとしても犬を野放しにせず食べ物を分け与えていました。タイの人々は、仏教徒の教えによって、人間だけでなく他の生命と共に生きるという精神が根付いているからだそうです。彼らは、私たち日本人が私服を着てスラム街の中を案内され歩いている姿を見て、日本からは支援を得ているからと受け入れてくれました。どこに住んでいる人も心は思いやりでいっぱいなのに、生まれつきお金があるかないかに左右される人生は悲しいと思いました。それは近年日本でも、貧困家庭が子孫に連鎖していくといわれますが、自分の力では変えることが難しいのだと思います。だからこのタイの訪問で見たときに、私たちが財団を支えたり、学校へボランティアに行ったりして支え、少しずつ現地の子供たちが、将来住みやすい環境で暮らせるようにしていきたいと考えるようになりました。

タイは、同じアジアということでとても親近感が湧いたし、人の気持ちを察しようと気遣うところが、日本と国民性が似ているのかなと感じました。温かみを感じられるとても過ごしやすい国です。旅行で行くと観光地として見る街や宮殿も美しいけれど、裏側にあった貧困地域での生活を知った上で思い返すと、どこで暮らす人々も、心が美しいと実感した旅でした。

タイのボランティア研修を通して

法学部法律学科２年　堀 翔一朗

私は、今回初めてタイに行きました。今回、私は瞬発的にこのプログラムの参加を決めました。というのも、中央大学に今まで、ボランティアを謳う海外研修がなかったからです。語学研修は基本的に自らの語学の向上を目的とするものですが、このボランティア研修は、ボランティアをしている「人」を学ぶものだと私自身思っており、得られるものは、今後の自分の人生により大きく役立つだろうと思い、参加を決めました。この研修は、まず 2 回の事前研修から始めます。初回の事前研修では、このプログラムに参加するメンバーの自己紹介と、タイに関するクイズに挑戦したりしました。2 回目の事前研修では、事前に役割分担して、タイについて調べてきたことをメンバーに対して、プレゼンしてきます。ちなみに私は、タイの流行について調べましたが、日本のサイトでは、ヤフー知恵袋から情報を得るのがやっとで、しかもその情報は、ほとんど正しくなかったで

す。この後は、タイ語の文字と最低限の会話表現を学んで、タイに少しずつ慣れていきました。

このプログラムが始まって、タイに到着すると、日本とは違う文化を感じました。まずは、南国の木々、タイの飲み物、食べ物、壁に貼ってある広告など、日本と類似していると思うものが少なかったです。それほどタイ独特のものが多くあるのだろうと実感しました。

３日目までは、バンコクから離れたところで、観光や異文化交流を行いました。そして、４日目からは、バンコクに戻り、まずは、JICA のタイ事務所に行きました。そこでは、事務所の次長の方が、開発途上国では今どんな問題が起きているのか、そこでどのような助けが必要なのか、その中で、JICA の役割は何なのかをわかりやすく講演しました。その中で、開発途上国は水問題が非常に深刻なため、JICA は、水の供給事業や浄水事業に特に力をいれていることがわかりました。開発途上国には経済成長を果たした後もまだまだ問題はあります。インフラ整備はもちろんのこと、貧富の格差をなくすための社会保障制度の是正など、開発途上国は、先進国と経済のレベルが同じになって初めて、開発途上国といわれなくなります。それまで、援助し続けるのが JICA の役割だとおっしゃっていました。最後の質疑応答で、JICA という仕事を続けられる動機について問われたところ、次長は、国と国をつなぐ架け橋になっている誇りがあるからとおっしゃっていました。

5 日目は、バンコク郊外のスラム街に行きました。このスラム街は、貧しい人たちが、土地の所有権なく、違法に家屋を建ててできた街です。私は、スラム街が初めてで、道が狭かったり、臭かったり、汚かったりと、環境の悪さにびっくりしました。このスラム街は、貧富の格差が生んだものなのだろうと、経済発展が必ずしも良いことだけをもたらすわけでなく、それに伴って経済の発展についていけなくなった人を持ち上げる制度の必要性を感じました。

他にも、生き直しの学校や、女児保護センターなどでは、親のいない子供たちをどのように保護し、社会復帰に導くのか、生きることについて、改めて考えさせられる場となりました。

今回、このプログラムに参加して非常に良かったと思います。今回のプログラムを通じて思ったことは、生きることとは、「支えあうこと」であると思いました。やはりこの世の中、一人でできないことばかりです。そんな時こそできる人ができない人を支えることで世界は回っていくのだと私は思います。世界に触れること、それは未知の世界に、自分を置くこと、今までの常識が通用しないことで、はじめて新しい刺激が得られます。私は、今回の研修でいろいろなものをみて、いい経験になりました。今回このプログラムを設けてくださった、小川さん、河本さん、そしてメンバーの方々、ありがとうございました。

活動報告

法学部政治学科１年　山口哲也

私がこのタイの研修に参加しようと思ったきっかけは、単に海外へ行きたいという思いが強かったことによるところが大きい。国際政治や国際協力、グローバル化した世の中に興味がなかったわけではない。しかしそれらの理解を深めたいというより、タイに行ってみたいという気持ちの方が強かった。そんな気持ちで参加した訳だが、結果としてこの研修では多くのものを学び、国際的な視野が広げることができた。

私が思うこの研修の最も特徴的なことは、観光地のような脚光を浴びている「光」の部分ではなく個人ではなかなか見ることのできない「闇」を見ることができることだ。生き直しの学校、女児保護施設では、恵まれない子供たちの境遇を知ることができたし、スラムでは所得格差について考えさせられた。個人的な旅行では問題意識を持って行動しないと、このような所には行かないし、整備された観光地で観光を済ませて終了だろう。研修前はタイのプラスイメージがほとんどだったので、こういった「闇」の部分を見学できたことは、大きな経験になった。

そういった「闇」を知ることで、物の見方や感じ方など様々なことが研修の前後で変わった。貧困の中での子供たちへの教育を施し方や、先進国から途上国への支援の仕方など、政治学を専攻している身としては、参考になる部分が多くあった。貧富の格差の増大は、現在の日本でも問題視され始めているし、海外の事案に触れ、視野広げることはそういった問題に取り組むうえで非常に大事なことであると感じた。そういった政治的な視点だけでなく、JICA でのお話では民間企業にいながらも国際協力に携わることが可能であることを知ることができた。国際協力を志す際に、JICA や国際機関で働くことだけが国際協力に携わる道ではなく、今後、自分の進路に応じてどのように国際協力に携わっていくのかを考える契機になった。そして、そういった社会問題を考える時だけでなく、タイでの日常でも様々なことに気づかされた。例えば街中でのこと。驚いたのが、バンコクやチェンマイではデパートの一角から、ナイトマーケットまで外貨両替がどこでも気軽にできるということや、観光地では外国語の表記が充実していること。タイは外国人観光客には過ごしやすい国だな、と思い、日本に帰って調べてみると、タイはアジアでは指折りの観光立国で、最近日本では訪日観光客が急増していると話題にされているが、まだまだタイには及んでいないのが現状であるということが分かった。日本にいたままでは恐らくそのことには気づかなかっただろう。

社会問題や日常的なこと、タイに行っていろいろと気づかされることは多かっ

た。何よりも強く感じたことは、外国を訪れることがとても勉強になるということ。外国に行かないと、上で書いたようなことは学べなかった。それがたとえ研修という形ではなく、旅行だったとしてもやはり日本にいては感じられないことを多く感じることができるだろう。

４．中央大学タイ短期研修プログラムに同行して感じたこと

中央大学・タマサート大学コラボレーションセンター
ティーラー･インサワート

中央大学の学生が短期研修でタイを訪れ、貧困層の人々が住む地区を視察するとともに両親を亡くしたり虐待を受けたりした子ども達がいる施設で交流やボランティア活動をすると聞いて、日本人の若者がタイにおけるこれらの社会問題に触れて、どのように感じるのだろうと思いました。また、この研修でタイを訪れる日本人学生の中に、海外に行くのが初めてだったり、タイに来るのが初めてだったりする人がいること聞き、スラムや子どもの保護施設など厳しい環境のところを訪問して大丈夫か、またタイ料理が口に合うかなどが心配になりました。しかし私達の心配をよそに、参加した学生はタイで初めて経験する様々な活動をとても楽しんでおり、それを見て感心しました。

タイでは、社会的弱者の人々の問題は特に目新しいものではないので、どれだけ深刻な問題になっているかということはあまり気にとめられていません。しかし、日本の学生が訪問する先々でタイの社会問題を真剣に理解しようと努め、積極的に質問をするのを見て、この研修は日本の学生が学ぶだけのものでなく、私達タイ人も深く考えさせられるものであることに気づきました。学生達は、タイの社会問題が日本の社会問題と大きく違うことについても理解を深めていました。私達タイ人も、これらの様々な社会問題を解決していくために現在行われている施策をどのように変えていくべきか、新たにどのような施策を行うべきかなどを考える良い機会となりました。

この研修を通して、学生は社会経験や知識を高め、研修で学んだことを体系的に深く分析できるようになります。様々な学部の学生がこの研修に参加しているので、それぞれの学生が一人ひとり違った観点からものを見て、違った印象を持ったことと思います。この研修を通して学生が広い心を持つとともに色々なものの見方を出来るようになったと信じています。学生はこの研修で人を思いやるやさしい気持ちをもち、人の役に立ちたいと思う気持ちを持つようになっているので、将来社会に出てからもこのことがきっと生きてくるでしょう。

最後に、外国に行ってその国の事情を理解するには、興味を持って楽しむことが大事です。タイはその第一歩として訪れるのにふさわしい国です。そして、今回この研修に参加した学生がまたタイを訪れて来てくれることを楽しみにしています。

（原文タイ語 日本語訳：小川正純）

５．事前研修の概要

国際センター
小川 正純

タイの現地研修に先立って下記の通り 2 回の事前研修を行った。

Ⅰ. 第 1 回事前研修

１． 実施日：2015 年 11 月 6 日（金）[於多摩キャンパス]

（※理工学部の参加者 1 名については、後楽園キャンパスで別途 2015 年 11 月 5 日（木）に研修を行った。）

２．概要：

・アイスブレキング

参加者同士が初めて顔を合わせる場であったので、最初に参加者の自己紹介を行った。3、4 人ずつのグループに分かれ、国際協力、開発途上国、タイのことなど様々なトピックスについて、各自が持っているイメージについてお互いに自由に話をした。グループのメンバーは、トピックス毎にローテーションで入れ変えた。

・現地研修の説明

現地研修の概要及び目的の説明、訪問先の紹介等を行った。

・課題の設定

タイ事情についてそれぞれ課題を全員に割り振り、第 2 回事前研修までに準備の上、発表することとした。

・渡航に関する手続き、留意事項等

現地研修でタイに渡航する際に必要な書類の提出と留意事項について説明を行った。

Ⅱ. 第 2 回事前研修

１． 実施日：2016 年 1 月 16 日（土）[於 JICA 市ヶ谷ビル]

２． 概要：

・地球体験学習

「平等」をテーマに、セネガルの事例を用いて、開発途上国の人々がどのような暮らしをしているか、どのような考えを持っているかなどについてグループに分かれてディスカッションを行った。

・JICA 地球ひろば　体験ゾーン見学

「人間の安全保障」をテーマにした世界の課題や国際協力を紹介した体験型展

示を見学した。

・課題発表

タイの歴史、政治、経済、日タイ関係、教育、文化等の課題について全員が発表を行った。発表内容については別紙の通り。

・タイ人留学生によるタイの紹介

タマサート大学のタイ人留学生 2 名により、タイの最新事情について紹介を行った。

・タイ語(会話、文字)

簡単なタイ語会話とタイ文字の書き方について学修を行い、全員が自分の名前をタイ語で書くことができるようにした。

・プレゼンテーションの準備

３グループに分かれ、日本の紹介、中央大学の紹介、「同性婚」についてのプレゼンテーションを行うこととし、その準備を行った。

・その他

タイのタマサート大学に交換留学していた中央大学の学生 2 名も一緒に参加し、本研修プログラムの参加者に助言を行った。

3.　学生の感想

第 2 回事前研修の後に取った参加者 12 名へのアンケートでの主な学生の感想は以下の通りであった。

（※本研修プログラムへの参加者は 13 名であったが、1 名が同日行われた就職予定企業における事前研修に参加して本研修を欠席したため、後日補講を行った。）

地球体験学習のワークショップ。3～4人が一つのグループとなり、ディスカッションを行った。

(1)　地球体験学習

・ワークショップは、とても考えさせられることが多く、国によって考え方、価値観が違い、お互いに理解するのは大変だと思った。その国の状況、文化などを理解していないと、その国の人たちの言動、行動力が理解するのはむずかしいことがわかった。

・少人数のグループワークであったため、議論がしやすかった。

・実在する人を題材としており、「あなたならこういう時にどういう行動をとるか」などのリアルな質問が多く、とてもためになった。

・日本での日常とは全く異なる開発途上国の事情を知ることができて、非常によ

い経験になった。開発途上国の想像以上に貧しい環境を知って、自分に何かできることをしたいと思った。

・イスラム教のことについて理解を深めることができた。日本人はイスラム教について偏見があるが、自分としては今回イスラム教に対しての見方を変える良い機会となった。

・このワークショップで、’give and take’がとても大事だということが、とても心に残った。この関係は、日本人にとっても、世界中の人々にとっても同じように大切である。こういう大切な経験をしたいと思っていたので、参加して良かった。

・青年海外協力隊がどのようなことをしているか知ることができた。

・日本がとても安全な国であることを実感できた。

（2） JICA 地球ひろば　体験ゾーン見学

・様々な側面から世界の格差などを学ぶことができて良かった。

・実物の地雷や民族衣装などが展示されているのでわかりやすく、それに関する話を地球案内人から聞くことができて勉強になった。

・実際にクイズを解きながら見学したため、理解を深めることができた。

・日本が恵まれており、自分がどれだけぜいたくな暮らしをしているのかに気づいた。

・日本の自給率が低いことを知り、日本がいかに輸入に依存しているかをあらためて考えさせられた。

・アフリカやアメリカから視察に来ている人たちもいて、開発途上国の問題は全世界で協力していくべきものだということを再認識した。

・村人が井戸から水を運ぶときのバケツの重さを体験し、実物の母子手帳を見ることができて良かった。

・対人地雷が、人を殺すための武器でなく、人の足を吹き飛ばす低威力のもので、負傷を負った人の看護や後送に人員を割き戦意維持を困難にするものという話が印象的であった。

JICA 地球ひろば　体験ゾーン見学の様子

（3） 事前研修

・タイに行く前に、タイについての知識・理解を深めることができてとても有意義であった。特に皆のタイについての発表で多くのことを知ることができて良かった。

・タイ人留学生によるタイ紹介は、インターネットなどだけでは得ることができないタイの今を知ることができてとても参考になった。

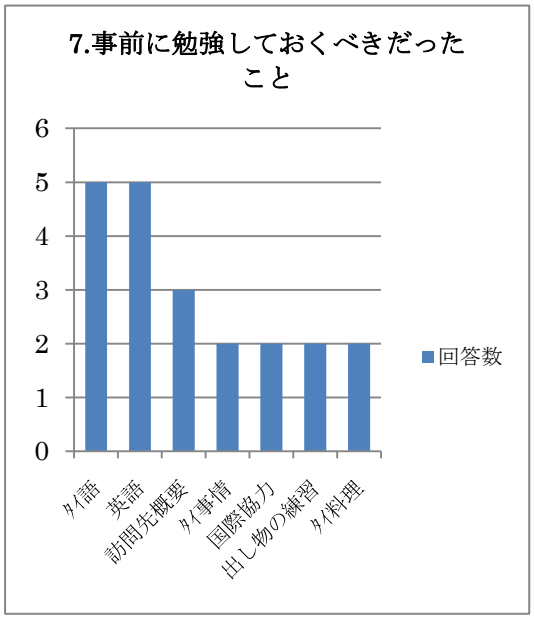
・タイ語の会話や、タイ語で自分の名前を書くことを学ぶことができてためになった。むずかしかったが、とてもためになり、楽しかった。現地研修に行くまでに、自分の名前を書いたり、簡単な挨拶ができたりするようにしていきたい。
・初めて会う人も多く少し緊張したが、皆の雰囲気が温かく、和むことができた。
・皆の研修に対する強い思いをみて自分もしっかり学びたいと思うようになった。
・自分で選んだ課題のテーマについて発表することは、自分で調べることによって、より興味を強く持てるようになった。

Ⅲ. 事前に勉強しておいたほうがよかったこと

タイ現地研修の後にとったアンケートで、タイ研修に行く前にもっと知っておいた方が良かったこと、勉強しておいた方が良かったことについて質問したところ、回答は以下の通りであった。

事前研修の様子

（1）タイ語：5
（2）英語：5
（3）訪問先の活動内容：3
（4）タイ事情：2
（5）国際協力：2
（6）出し物（歌、踊り）の練習：2
（7）タイ料理に味覚をならす：2
（8）タイの地理：1
（9）スラムについて：1
（10）世界情勢：1
（11）寺院の歴史：1



最も多かったのは、タイ語と英語の修得についてであった。タイ語をもう少し踏み込んで勉強しておけば、生き直しの学校やタンヤポーン女児保護センターの子ども達ともっとコミュニケーションがとれたであろうという声があった。英語についても、もっと話すことができれば、タマサート大学の学生やアジア太平洋障害者センターでコミュニケーションがとれたのに

という声があった。
この研修に参加したことにより、学生が外国人とコミュニケーションをとるためにもっと外国語を勉強する必要があるということに気づき、今後の外国語習得の良いきっかけづくりになったと考える。英語については、タマサート大学の学生の英語コミュニケーション能力が高かったことは、参加した学生にとって大きな刺激になっている。また、事前研修をもっと増やすべきとの声があった。今回は第 1 回目で募集時期が遅かったこともあり、事前研修を 2 回しかできなかったが、第 2 回以降、募集を早めにやれば、事前研修をもっと増やすことも検討可能と考える。

出し物（歌や踊り）の練習をもっとしておくべきだったということについても、事前研修を増やすことにより、全員集まって出し物の練習をする機会も増やすことが可能となる。

Ⅳ. 所感

この研修を行うにあたり、事前研修を実施して、参加者同士がお互いのことを知るとともに、研修のテーマと目的を理解し、渡航先であるタイの事情を把握できたことは、とても有意義であった。

特に、全員がタイに関する様々なトピックスついて調べて発表を行ったことは、自分で調べることによりそのトピックスについて理解を深め、他の参加者の発表を聞くことにより、自分にない視点を持つことができ、お互いに刺激を与えることができたと言える。第 2 回事前研修では、タマサート大学のタイ人留学生 2 名と中央大学からタマサート大学に留学していた日本人学生 2 名がチューターとして参加し、参加者に様々な助言を与えることにより、参加者は臨場感のあるタイのイメージを持つことができた。タイ語の学修は、時間の制約があり、簡単な会話とタイ文字で約 1 時間しかできなかったため、タイ語がどのようなものか紹介するにとどまった。研修後のアンケートで、英語とともにタイ語をもっと勉強しておくべくだったという声が多くあったことは、現地でタイ人とタイ語や英語でコミュニケーションを取る機会が多かったことを示している。

この研修では外国語の学修は主たる目的でなく、外国語は現地の人と交流するための手段として位置づけられるが、学生が外国語の習得の重要性を痛感し、今後外国語を一層学修したいと思う良いきっかけとなったことはうれしいことである。

JICA 地球ひろばのロビーにて。事前研修には、タイ人留学生やタイに留学経験がある中大生も一緒に参加した

６．タイ短期研修プログラムの意義

国際センター
小川 正純

Ⅰ. タイ短期研修プログラムの位置づけ

外国の文化や現状、その国々の人々、特に自分と同世代の学生の考えを知る機会を得るとともに、日本の開発途上国への支援の状況を実際に現場で見てみたい、また、海外でボランティア活動をやってみたいと思っている学生は多い。本来は、数ヶ月から 1 年間程度留学や海外インターンシップ等をして、生活の基盤を外国におき、その国の文化や事情を吸収し、現地の人々と交流することができればよいのであろうが、短期での留学あるいは研修の経験を望んでいる学生も多い。

中央大学においてはゼミ単位での海外研修や各学部で実施している単位認定を伴う短期海外派遣プログラムがある。しかし、全学部･学年を対象として参加可能な短期海外研修プログラで、国際協力や海外ボランティア活動に焦点をあてたものは本プログラムが初めてとなる。

本研修プログラムは、留学などの海外長期滞在を検討する前の段階の学生や、短期間で外国の学生との交流、国際協力の現場視察やボランティア活動をやってみたいという学生のニーズを実現させるための大学のプログラムとして位置づけられるものである。

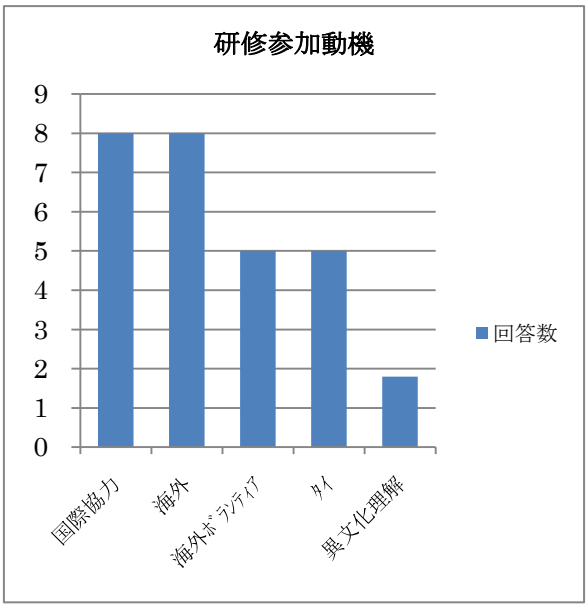
Ⅱ. 参加動機

本研修プログラムに参加した学生は、どのような動機で参加したのであろうか。タイ現地研修終了後、このプログラムを今後さらに発展させるために、参加者全員にアンケートをとった。その結果は下記の通りである。

1. 「タイ短期研修プログラムに参加した動機は何ですか」という質問についての回答は以下の通りであった。（複数回答で）

(1)国際協力に興味があったので：8
(2)異文化理解を深めるため：2
(3)タイに興味があったので：5
(4)（タイに限らず）海外に興味があったので：8
(5)海外のボランティア活動に興味があったので：5
(6) その他：0

最も多かったのは「国際協力に興味があったので」と「(タイに限らず)海外に興味があったので」が同数(回答数 8)で、この二つで約 6 割を占めた。また、この二つに次いで「海外のボランティア活動に興味があったので」が「タイに興味があったので」と同数の回答数 5 で多かった。本研修の狙い通り、国際協力、海外、海外ボランティアへの関心が高い学生が参加している。



本研修プログラムの参加申込をする際に、動機、抱負を書いてもらっている。その中で、主なものは以下の通りである。

・開発途上国の貧富の格差などの問題に関心があるので、このプログラムに参加して、直接社会貢献をしたい。
・ボランティア活動を今まで行ってきたが、さらに大きな視野を持つ必要性を感じるようになった。この研修で得たことを日々の活動だけでなく、学科での研究にグローバルな視野を取り入れ、将来の進路に役立てたい。
・単なる海外旅行では体験できない現地学生との交流やボランティアを通じて、異文化理解や国際協力について理解を深めたい。
・実際に国際協力の現場の状況を自分の目で見るとともに体験して、国際協力のためにどのような取り組みをしているのか積極的に学びたい。また、現在の国際協力における課題を見つけ、どのように解決していくべきかを考えたい。
・ゼミで開発途上国の開発を学んでいるが、現地の人々が今どんな状況で暮らしているのかわからないことがある。このプログラムに参加することで、自分の目で直接現状を見て、タイの人々との交流を通して様々な面から意見が聞けると思い応募した。
・将来 JICA などの国際協力の関連機関で仕事をしたい。本プログラムに参加して、現地の人々と触れ合い、実際にボランティアなどを体験して、国際協力について多くのことを学びたい。
・タイが経済発展している反面、貧富の格差が大きいことに関心を持っている。特にスラム街に行き、貧富の格差をこの目で見て、多くのものを感じたい。

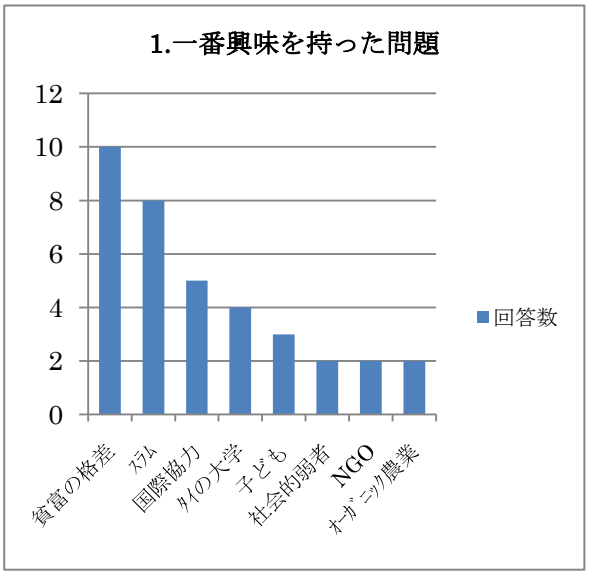
Ⅲ. 研修結果

本研修プログラムに参加した学生は、どのようなことやどのような訪問先に興味を持ち、どのようなことが印象に残ったのか。現地研修後のアンケートの結果を以下に紹介する。

1. 「タイ研修において一番興味を持った問題は何ですか」という質問についての回答は以下の通りであった。（複数回答で）

(1)日本のタイに対する国際協力について:5
(2)貧富の格差等について　：10
(3) 社会的弱者（障がい者、貧困層等）の問題 について：2
(4) タイの恵まれない子ども達の状況について　：3
(5)スラムの問題について：8
(6) オーガニック農業について：2
(7) NGO の活動について：2
(8) タイの大学について：4
(9)その他：0

学生が一番興味を持った問題は、「貧富の格差等について 」(回答数 10)であった。タイ国内での格差が大きいこと、特に首都バンコクの中においても高層ビルなどが立ち並んでいる一方で、すぐ近くに貧しいスラム街があることに強い関心を示している。



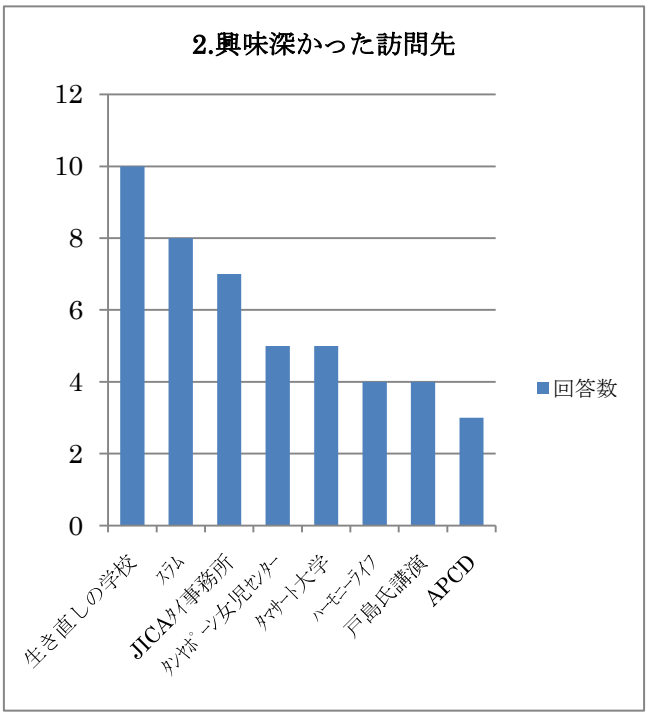
2 番目に多かったのが「スラムの問題について」(回答数 8)である。クロントイ･スラムに行き、日本では想像できないような貧困の状況を目のあたりにしたことが強い衝撃を与えている。

3 番目は「日本のタイに対する国際協力について」(回答数 5) であった。国際協力機構（JICA）タイ事務所で日本のタイに対する協力の状況について説明を聞き、アジア太平洋障害者センターなど JICA が協力を行った現場を視察することにより、タイにおける日本の国際協力の貢献度の大きさに刺激を受けている。

2.「タイ研修の中で興味深かった訪問先はどこですか」という質問についての回答は以下の通りであった。（複数回答で）

(1)タマサート大学ランパーン・キャンパス：5
(2) 生き直しの学校（プラティープ財団）：10
(3)JICAタイ事務所：7
(4)クロントイ・スラム（プラティープ財団）：8
(5) アジア太平洋障害者センター：3
(5) タンヤポーン女児保護センター：5
(6) ハーモニーライフ・オーガニックファーム　：4
(7) 戸島國雄氏講演：4

学生が最も興味を持った訪問先は、「生き直しの学校（プラティープ財団）」（回答数 10）であった。つらい過去や背景を持ちながらも、明るく笑顔で力強く生きていることに強い感銘を受けている。前述 1. の一番興味を持った問題と同様、スラム街(回答数 8)や JICA タイ事務所（回答数 7）に興味を持っている学生も多かった。「タンヤポーン女児保護センター」（回答数 5）は、生き直しの学校と同様、様々なつらい過去を背負いながら入所者の子ども達が輝くような笑顔でいることが強い印象を与えている。タマサート大学ランパーン･キャンパス（回答数 5）は、タイの大学生と交流が持てたこと、タマサート大学の学生の勤勉さ、英語力の高さが印象的であったようである。

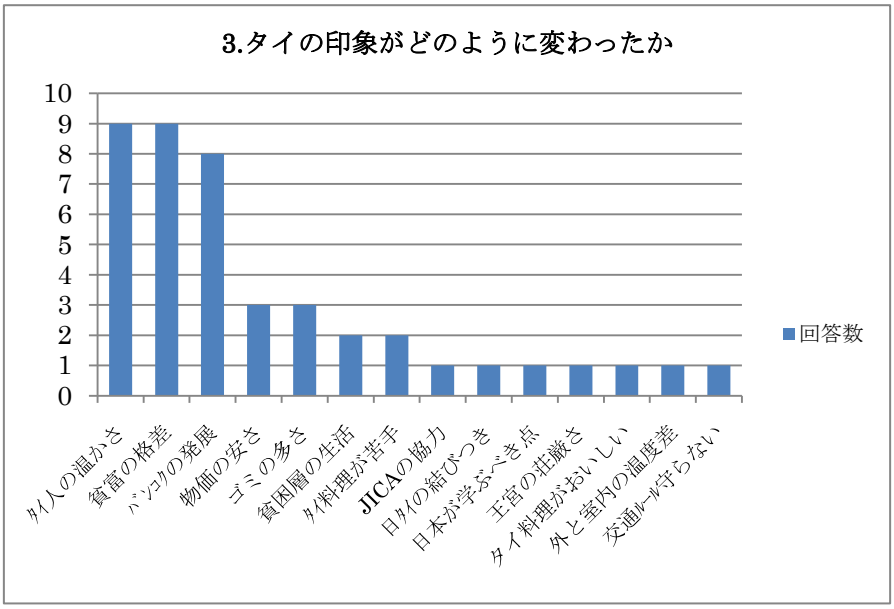


3.「タイ研修に行く前と後でタイの印象は変わりましたか」という質問についての回答は以下の通りであった。

<u>変わった：11</u>
<u>思った通りだった：2</u>

参加者 13 名中 11 名とほとんどの学生が、タイ研修に行く前と後でタイの印象が変わったと回答している。「変わった」と回答した 11 名に、「タイの印象はどのように変わりましたか」という質問をしたところ、主な回答は以下の通りであった。

（１）タイの人々の温かさ、人柄の良さ、笑顔、おもてなしの心に感動した:９
（２）バンコクの経済発展の影で隣接して貧困層が住むスラムがあり、貧富の格差が大きいことに驚いた:９
（３）バンコクに高層ビルが立ち並び、想像以上に発展していること:８
（４）物価が安くて買い物が楽しかった：３
（５）ゴミが多くて街が汚れていた：３
（６）貧困層の人々や家庭環境に問題がある子ども達が多くいて、スラムの状況などは想像以上に厳しいものであった：２
（７）タイ料理が苦手であった：２
（８）JICA によるタイへの協力の貢献度が高かった:１
（９）タイと日本の結びつきが大きかった:１
（10）オーガニックファームや子どもの福祉など、日本が学ぶべき点があった：１
（11）王宮の壮大さ、荘厳さにタイの国力を感じた：１
（12）タイ料理がおいしかった：１
（13）外が暑い一方、室内はエアコンできいており、温度差が大きかった：１
（14）交通ルールが守られていない：１



タイの人々温かさ、人柄の良さ、笑顔、おもてなしの心に多くの学生が感動している。行く先々で、タイの人々はとても温かく学生達を迎え入れてくれた。特に、生き直しの学校で交流した子ども達が厳しい経験をしてきているにもかかわらず、いつも笑顔で学生に接してくれたことにより、学生は元気をもらっている。

「生き直しの学校」の子ども達は明るく笑顔を絶やさない

また、首都バンコクが想像以上に発展しており、東京に引けをとらないような大都会であること、同じバンコクの中でも、高層ビルのすぐ近くに貧困層が住むスラム街があることに大きな衝撃を受けている。スラム街を訪問して貧困層の生活を目のあたりにし、想像以上に厳しい生活ぶりであることにも驚きを見せている。

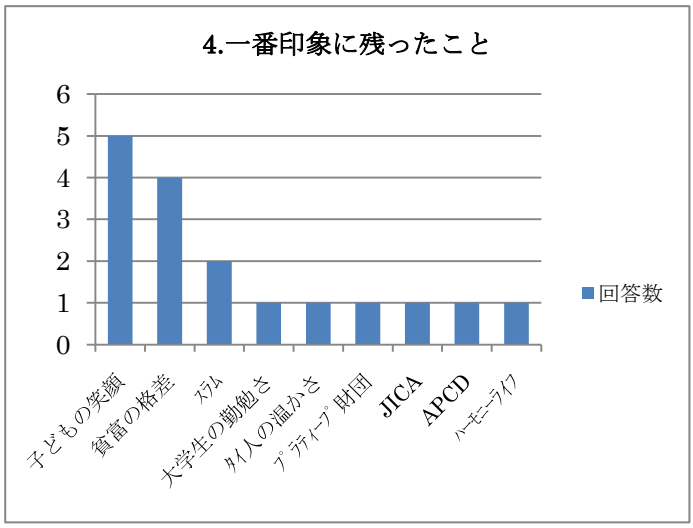
タイ料理に関しては、ここでおいしいとコメントしているのは1名だけであったが、実際に研修中の声を聞いている限りでは、ほとんどの学生がタイ料理について好意的であった。一方、タイ料理が苦手な学生も一部いて、彼らにとっては連日タイ料理を食べるのは辛かったようである。

4.「本プログラムで一番印象に残ったことは何ですか」という質問についての回答を 分類すると、以下の通りである。

（1）一緒に交流したタイの子ども達の生き生きとした笑顔：5
（2）タイにおける都市と地方の貧富の格差、バンコクの中での貧富の格差が大きかったこと：4
（3）スラム街の貧困層の生活：2
（4）タイの大学生の勤勉さ：1
（5）タイの人々の温かさ：1
（6）ドゥアン·プラティープ財団の活動：1
（7）JICA の国際協力がタイの発展に貢献していること：1
（8）アジア太平洋障害者センターがアジア太平洋地域の障害者コミュニティーに大きく貢献していること：1
（9）ハーモニーライフ·オーガニックファームで、農作業をやってゆったりと自然と触れ合い、心が安らいだこと：1
（10）タイが観光の振興に力を入れており、一般市民の英語力が高いこと：1

（11）引率者や他の参加者と知り合いになり、話す機会があったこと：1

本研修プログラムで、学生が一番印象に残ったことは、生き直しの学校、クロントイ･スラムにあるドゥアン･プラティープ財団の幼稚園、タンヤポーン女児保護センターの子ども達と交流したことである。貧富の格差の大きさやスラム街の貧困層の生活の厳しさも強い印象を与えている。



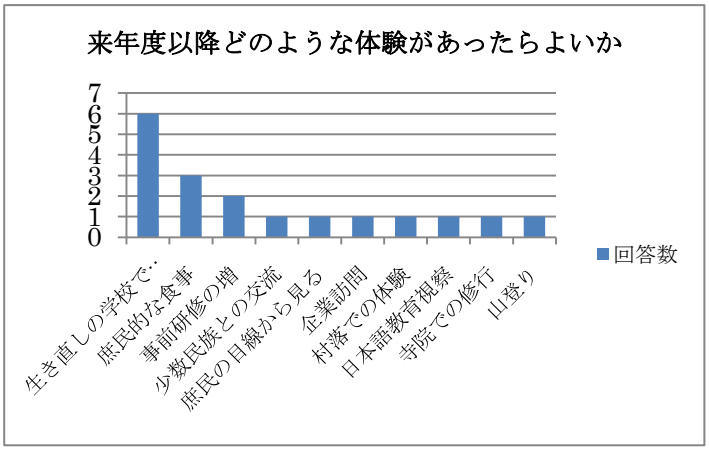
Ⅳ. 次年度以降の研修内容を検討するにあたっての留意点

アンケートの「来年度以降の本プログラム実施の参考として、どのような体験があったら良いと思いますか」という質問についての回答を分類すると、以下の通りである。

（1）生き直しの学校などの訪問先に宿泊し、もっと滞在日数を増やす：6
（2）豪華な高級レストランでなく、もっと庶民的な食事をすべき：3
（3）事前研修、出し物の練習を増やす：2
（4）少数民族との交流：1
（5）庶民の目線からタイを見る機会：1
（6）タイの現地企業訪問：1
（7）村落での体験：1
（8）日本語教育の現場視察：1
（9）タイの寺院での修行：1
（10）山岳地帯における山登り：1

生き直しの学校などの訪問先に宿泊し、滞在日数を増やしてもっと子ども達との交流を増やすべきとの声が最も多かった。今回は、訪問時期がタイの学校が休み期間中でなく、土日以外は、昼間に子ども達が近隣の学校に行って不在であることと、期末試験の直前で子ども達が試験勉強をする必要があったことなどで、生き直しの学校に宿泊ができなかった。

食事については、もっと庶民的な食事をしたいという声もあった。場所やスケジュール上の都合でどうしてもレストランで全員そろって食事をせざるを得ない場合はあるものの、夕食を自由行動とし、学生がフードコートや屋台でも食事できるような機会を増やすことも検討してよいのではないかと考える。



V. タイ短期研修プログラムの意義

本研修に参加した学生の多くが、自分の将来を決定づけるような経験をしている。学生は、タイの首都バンコクに近代的な高層ビルが立ち並び、そのすぐ近隣に貧困層が住むスラム街が存在するのを目に当たりにし、タイの貧富の格差に大きな衝撃を受けた。

学生はクロントイ･スラムを自分の足で歩き、底辺で生きる人々の厳しい生活の現実を自分の目で実際に確かめた。そこで体感した鼻をつくような臭いは日本に帰るまで頭からはなれなかったという。

クロントイ･スラムの中を歩く

JICA タイ事務所における日本のタイに対する協力の概要説明や意見交換、アジア太平洋障害者センターやタンヤポーン女児保護センターなどの JICA が協力を行っている現場視察を通じて、実際に開発途上国でどのような協力が行われているかを肌で感じ、理解することができた。

ハーモニーライフ･オーガニックファームでは、有用微生物(EM)を使ったぼかし肥料づくりや農作物の収穫などを体験した。環境保全やオーガニック農業の重要性に理解を深めるとともに、大自然の中で土に触れることで、大らかな気持ちになることができた。

また、多くの人々との出会いが学生の心に残った。タマサート大学ランパーン･キャンパスの学生とは、プレゼンテーションやディスカッションを通じて、言葉の壁を乗り越えて、自分たちの考えや文化を伝え、タイ人学生が何を考え

ているかを懸命に理解しようとした。日本人とタイ人の学生が一緒にナイト･マーケットを散策し、屋台で買った食事をともにして語り合い、親交を深めた。

生き直しの学校やタンヤポーン女児保護センターの子ども達は、言葉につくせないほどつらい経験をしているにもかかわらず、いつも明るい笑顔を絶やさず力強く生きている。言葉がほとんど通じないにもかかわらず、身振り手振りでコミュニケーションを図り、肌と肌で触れ合うことで、学生は子ども達から元気と勇気をもらっている。

また、子ども達が学生達を歓迎するために披露してくれたタイ舞踊や音楽の感動は、学生の心に深く響いた。子ども達は訪問客を歓迎するためだけにタイ舞踊や伝統音楽の練習に励んでいるわけではない。すぐれた芸術や文化は、人の心を癒すといわれている。子ども達は、舞踊や音楽を通して、素晴らしい伝統芸術を持っているタイという国に生きているという自信を持っている。そういう子ども達の思いや自信が、学生に伝わって感動を与えたのではないだろうか。

「生き直しの学校」でソーラン節を披露する中大生

学生が披露した音楽と踊りもタイの子ども達の心に深く刻まれた。タンヤポーン女児保護センターには、親の貧困や虐待等で家族とともに暮らせない子ども達が生活している。　学生が日本語で合唱した映画「アナと雪の女王」の主題歌『ありのままで』に、子ども達は鳥肌が立つほど感動したという後日談を、同センターに青年海外協力隊員として派遣されている野村麻美さんがしてくれた。その後、野村さんは子ども達から『ありのままで』の歌をことあるごとにリクエストされるようになり、タイ語バージョンを口ずさむ少女もいるという。また、学生が踊ったソーラン節は、子ども達が初めて生で見た日本の踊りで、とても興奮し、同センターのスタッフからも、アクティビティーとして取り入れてみたらどうか、という話が出たそうである。

このように、学生達はタイの人々から多くの感動をもらうとともに、タイの人々の心に残る感動をたくさん与えている。この研修で学生は、タイという国で起こっていることを五感で感じ取り、国際協力や海外ボランティアへの理解を深めたことはもちろん、タイの人々と出会って得た感動は一生の財産となり、今の自分に何ができるか、将来自分がどのような道に進み、そのために大学で何を勉強するべきか考える良い機会となったと確信している。

あとがき

国際センター
河本 梨絵

「タイで体感」―
説明会では、思わず口にするのを思わずためらった駄洒落のようなキャッチコピーですが、現地研修が進むにつれて、このコピーにして良かったと感じるようになりました。
多くの参加学生が言っているように、タイは、バンコク都市部の経済発展と都市部の裏に広がるスラム、都市と地方の間には大きな格差が存在します。この格差はタイに限ったことではありませんが、海外に出ることが初めての学生が参加者の半数を占める今回の研修プログラムでは、学生が受けた衝撃をより強く感じることができました。
　研修では、家庭環境に恵まれない子どもたちにたくさん出会いました。例えば「生き直しの学校」では、家庭で受けることができなかった分の愛情を満たすように、子どもたちが人懐こい笑顔で参加学生の手を引き、彼らの生活に招き入れてくれました。タンヤポーン女児保護施設では、入所している女の子たちが訓練する様々な手工芸を本学参加学生につきっきりで教えてくれました。事前のタイ語の学習は限定的だったため、どちらも言葉はほとんど通じませんが、身振り手振りと笑顔が意思の疎通を助けていました。タイの人は、老若男女、概して穏やかです。それは貧富にかかわらず平等で、訪問する先々で温かい笑顔で迎えられたことに、参加学生は多少戸惑いを感じていたようでした。自分たちの境遇は大変なはずなのに、どうして笑顔でいられるのだろう―彼らに対して自分は何ができるのか、引率の私たちに疑問を投げかけた学生もいました。貧しくても家庭環境に困難があっても、それは憐れむべき対象なのではなく、自分たちの隣人として共に支え生きるという意識に触れた時間になったように感じます。

　学生たちがタイで体感したこと。
例えば、バンコクの熱気。都心部の大渋滞。タイ料理の辛さ、甘さ。例えば、経済発展と表裏一体の貧困層の暮らし。子どもたちの笑顔。施設を支えるスタッフの皆さんの気持ち。タイの国際協力現場で奮闘する日本人の気持ち。その国を知ること、違いを受け入れることの大切さ。言葉の大切さ、言葉以外を使った意思疎通の大切さ。

１０日間という短い期間ではありましたが、参加学生たちは毎日元気に、水を吸い上げるスポンジのように日々の経験を吸収していきました。中央大学ではそれぞれ別の学部、別の学年で学ぶ参加者が「タイで体感！国際協力・ボランティア　タイ短期研修プログラム」を通して同じ経験を共有することで、より多様な視点から課題にアプローチできたと感じています。プログラムを終え、派遣時４年生だった学生が社会人になった新学期の現在も連絡を取り合い、情報を共有しあっていることは、プログラム運営担当としても嬉しい限りです。

タイのいくつかの側面を見ることができた今回のプログラム。参加学生の「これから」の糧になることを願ってやみません。

最後に、我々の研修にご協力いただき訪問を快く受け入れてくださった下記各団体の皆さまに心よりお礼申し上げます。

-タマサート大学（法学部、及びランパーンキャンパス）様
-ドゥアン・プラティープ財団　（生き直しの学校、クロントーイ・スラム）様
-国際協力機構（JICA）タイ事務所　様
-アジア太平洋障害者センター　様
-タンヤポーン女児保護施設　様
-タイ国家警察大佐　戸島國雄　様
-ハーモニーライフオーガニックファーム　様
（訪問順）

帰国前夜